

フエの古墓資料調査

篠原啓方

Research on the old tombs in Hué

SHINOHARA Hirokata

フエには後期黎朝以降の古墓が各地に散在している。本稿は、周縁プロジェクトにおける比較史の視点から、近世ベトナムの古墓のあり方を理解するための調査である。村の共同墓地、華人系の墓やフエ在地有力層、皇室、宦官などの墓を調査し、その基礎データを整理している。

キーワード：ディアリン（地霊）、慈孝寺、阮科族、明香陳氏、万福寺

はじめに

筆者は2008年夏から2010年春の間、4回にわたってフエを訪れ、墓と碑石の調査に携わった。本稿はその成果報告である。調査には、筆者と岡本弘道のほか、大学院生であった熊野弘子、三宅美穂（以上2008年度）、稲垣智恵、氷野歩（調査時の姓は川端）、陳其松（以上2009年度）の各氏が参加した。同報告は以上のメンバーによるデータの整理と報告に基づいている。本稿ではデータの紹介を中心とし、全体の傾向や具体的な考察については別稿「フエの古墓の特徴と編年について」に譲ることとする。

1. 調査の対象と方法

1) 調査対象

調査の対象はフエの古墓である。本章の古墓とは、いわゆるベトナム最後の王朝であるグエン（阮）朝の終焉（1945年）以前に造られたものを指す。調査を開始した時点では、外見上もしくは墓誌や墓碑の内容から古墓と判断されるものを選択的に調査していたが、後代に改修された例も多く見た目では判断できないことが分かり、家譜資料や聞き取り調査などを参考に、由来が古いとされる墓も含めることにした。本稿では全部で83基（埋葬主体部の数）の古墓を紹介している。

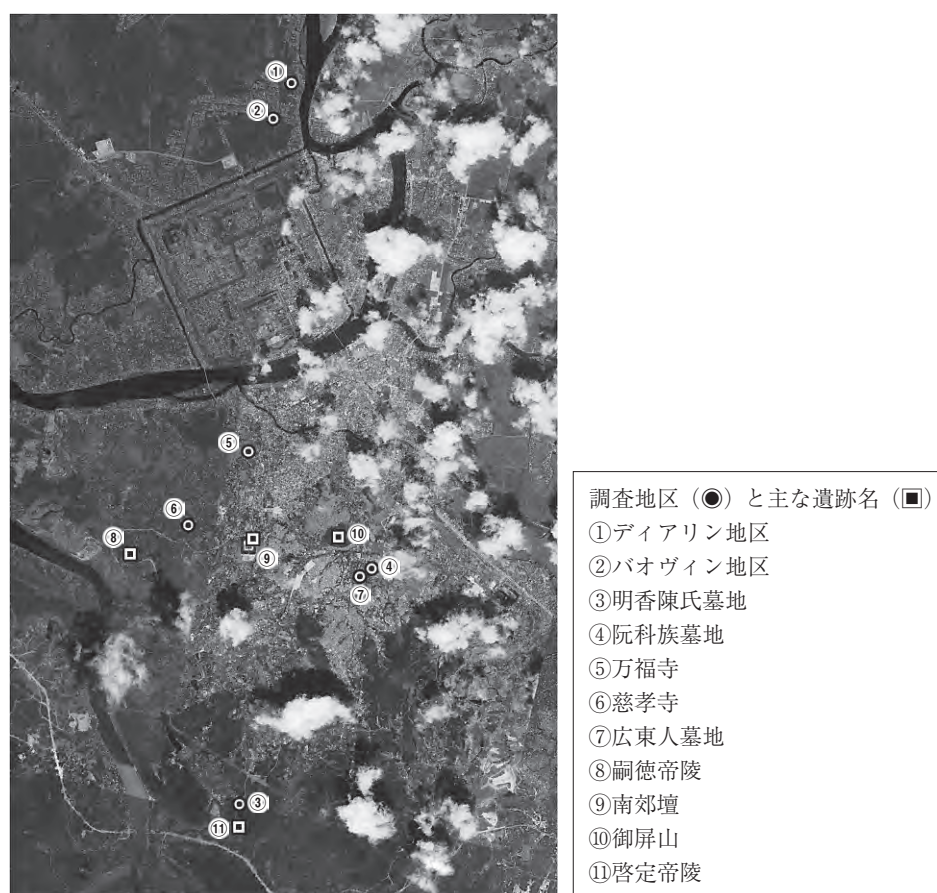


図1 (グーグルアースにて作成)

調査地域は、フィールドワークの中心となる都城東北部の村落にとどまらず、フォン（香）江以南の帝陵周辺にまで範囲を広げた（図篠原1）。ただし諸般の事情から網羅することはかなわず、ごく一部の調査にとどまっている。

2) 調査方法

墓の分析は、大きく構造物（規模、型式分類、方位）と墓誌（位置、内容）に分けて行なった。先行研究としては、20世紀前半フランス人宣教師L. Cadièreが行なった調査報告があり、多くの様式が絵図と解説によって記されている¹⁾。現在失われてしまった墓の事例が多く紹介されており、貴重な成果である。ただその趣旨や分類の考え方は本稿の方向性とは異なり、そのまま利用するのは困難であるため、別の分類方法を採用することにした。

1) L. Cadière 1928 Tombeaux Annamites dans les environs de Hué. Bulletin des Amis du Vieux Hué. 15-1: pp 1-99.

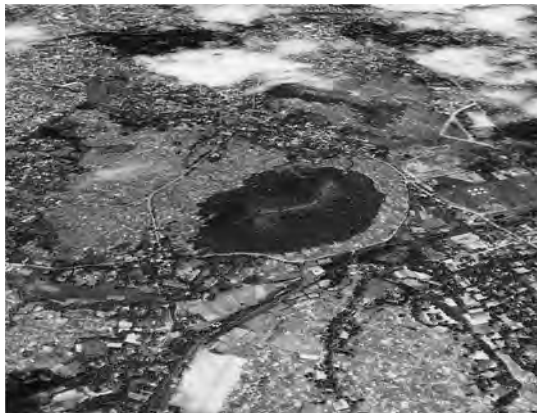


図2（グーグルアースより）

2. 古墓の概容と型式分類

1) 古墓の概容

墓は中心に埋葬主体部を有し、その外側に円形もしくは方形の構造物がめぐらされる。この外周を持たないものもある。構造物は、磚や石を積み上げ、その外側に漆喰（もしくはコンクリートか）を塗って形を整える。細かな装飾は、乾燥前に施されるのであろう。通訳者の話では、フエで使用される漆喰の主成分は石灰とサトウキビであり、砂、藁、紙なども混ぜられるという。墓には今も漆喰が使われているが、コンクリート製もあるという。ただ筆者にはその判別はつかなかった。

フエの墓の特徴としてビンフォン（屏風）がある。ビンフォンとは、建物や墓に設けられた単独の構造物である。前方にあるものは、多くの場合入口と奥との間に立ちはだかる仕切りの役割を果たし、進入者はこのビンフォンを迂回して奥に進むことになる。同様の構造物は中国南部や沖縄にも存在するが、ベトナムでは特にフエにおいて多く見られるという。ビンフォンを立てるのは風水と関係があり、邪気や不幸を防ぐという観念に基づくようである²⁾。墓においては、奥壁にも設けられる例も多い。

フエにおける墓の選地は風水との関係が大きいという。墓は至る所に造営されているが、特にフエ南の御屏山の周囲が良いとされ、墓が密集している（図篠原2）³⁾。

墓の成立年代や性格を特定する上で文字資料は貴重な情報源である。ベトナムでは阮朝までは漢字が主な公用字であり、古墓には漢文で記された文字資料が各所に施されているが、中でも重要なのが墓誌である⁴⁾。現代の墓誌は、1945年に正式採用されたクオックゲー（国語）表記であるが、漢字とクオック

2) フエの村落で家屋の構造を調査した際、大通りに面する家や廟の入口が道路と平行せず、若干角度をつけて設けられる例を多く見た。これも邪鬼（気）などがまっすぐに入ってこられないようにするためのものであるという。中国の俗説に邪鬼は直進しかできないというものがあるが、その思想が影響したものであろうか。ちなみにディアリン地区をはじめ、フエの数カ所で中国起源の辟邪物の一つである「石敢当」を見た。

3) 通訳の話では、現在は墓を造ることのできる場所は規制されているという。

4) 本稿では、墓主に関する情報を提供する文字資料（墓碑や墓誌）の通称として墓誌を用いている。ただ形態上の区別が必要な場合は、単体で立ち、固定された碑形のを「墓碑」、他の構造物にはめ込まれたり、置かれたりしているものを「墓誌」と表現している。

グーを併記したものも多い。現在では漢字・漢文の教育は一般に行なわれていないため、漢文を墓碑や墓誌に刻む場合は、村の知識人や、祭文の作成業者などに依頼するという。

墓誌は石製のものや、石やレンガで形を作り、その上に漆喰を塗って文字や装飾を施したものがあ。漆喰を表面に塗るのは、刻字が容易なためであろう。ただ調査では細かな判別や数の比較はしなかった。

墓誌以外にも、土地の神（后土碑）を祀る構造物を設けた例がみられる。多くは墓域の外にあり、個人や集団（一族）の墓に対して設けられる。これも風水の影響と考えられる。

2) 型式分類

考察の便宜上、外周と埋葬主体部、ビンフォンの有無で分類した。図版の多くは写真資料で補ったが、略測に基づき平面図を提示したのものもある。

(1) 外周（墓域）

本稿では、調査対象も少なく、現時点での細分化はあまり意味をなさないと判断し、外周を方型と円型に大別し、入口の型式などから数種に分類した（表篠原1、2）。

- 方Ⅰ型：外周を方形の塀で囲ったもの。
- 方Ⅱ型：方形の塀に羨道もしくは前室がとりつくもの。
- 方Ⅲ型：方形の塀の内部に、さらに円形の塀を設けたもの。
- 方Ⅳ型：埋葬主体部が、方形の塀によって幾重に囲まれるもの。大型である。
- 円Ⅰ型：外周を円形の塀で囲ったもの。
- 円Ⅱ型：円形の塀に羨道もしくは前室がとりつくもの。
- 円Ⅲ型：円形の塀が幾重にも存在するもの。大型である。

表1

方Ⅰa	方Ⅱa	方Ⅲa	方Ⅳ
方Ⅰb	方Ⅱb	方Ⅲb	
	方Ⅱc		


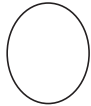

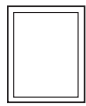
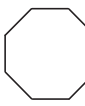
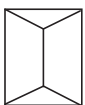

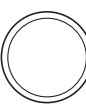
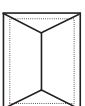

表2

円Ⅰ	円Ⅱa	円Ⅲ
	円Ⅱb	
	円Ⅱc	

(2) 埋葬主体部

フエで聞いた話によると、埋葬主体部は外見から箱、卵、馬、桃に喩えられている。また馬形は中国人墓、箱形はベトナム人墓の傾向が強く、卵形は18世紀の特徴であり、中国人・ベトナム人のいずれにも例があるという。この話を参考に、本稿では主体部の最上段の形態を以下のように分類した（表篠原3）。

表 1

A-1	B-1	C	D-1	E
				
A-2	B-2		D-2	
				
A-3			D-3	
				

- A式：外周が方形をなす、いわゆる箱形である。箱形が数段ピラミッド状に積み上げられたものは段数を記した。A-2は最上段が寄せ棟の形状をなすもので、A-3は寄せ棟状の最上段が庇のように下の段より張り出したものを指す。
- B式：外周が円形や楕円形に近く、立面が半球形をなすもの。いわゆる卵形である。平面の円の長径が尖ったもの、両端に凹みの入ったものなどもこれに含めている。また桃形については、説明からは具体的な形状が理解できなかったが、調査の限りでは基本的に立面が半球形のものに含まれるものと判断されるため、別途に分類をしていない。A式と同様、段を持つものもある。
- C式：平面は前方後円形で、側面は前方と後円が盛り上がり、接合部が窪んだ形をなす。馬形のことと思われるが、馬の鞍に喩えたものであろうか。A式同様、段を持つものもある。
- D式：A～C式が全体を漆喰もしくはコンクリートで固めたものであるのに対し、D式は縁のみを漆喰もしくはコンクリートで作り、内部に土や石を入れたもの。墳丘状に盛り上げたものもある。D-3は土を盛っただけのものであるが、必ずしも円形をなしているわけではない。
- E式：塔の形をなすもので、多くは僧侶の墓と思われる。

(3) ビンフォン

ビンフォンは、①式：埋葬主体部の前方（入口寄り）のみの設置、②式：奥（壁）にのみ設置、③式：①と②のいずれも設置、④式：なし、の四つに分類した。①の場合は、設置場所に差があるが、細かな分類は行なわなかった。

(4) 墓誌

墓誌は、位置を墓前と奥壁に分けて記し、文は略字体で翻刻して示した。

3. 調査の成果

1) ディアリン（地霊）・バオヴィン（褒栄）の古墓

ベトナム・フェにおけるフィールドワークの中核とも言える地区である。両地区には大きな共同墓地があり、他にも小規模な墓地が点在している。両地区を最初に開いた人物（開耕祖）の墓などを調査することができたが、由来の古い墓はまだ多く存在するものと思われる。ここで紹介するのはディアリン地区10基、バオヴィン地区4基である。

(1) ディアリンの古墓

古墓はディアリン地区の大きな共同墓地に点在する（図篠原3）。墓地は地区の西部にあり、南北に広がっており、その西側には地表面が1～2m低い水田地帯が広がる。

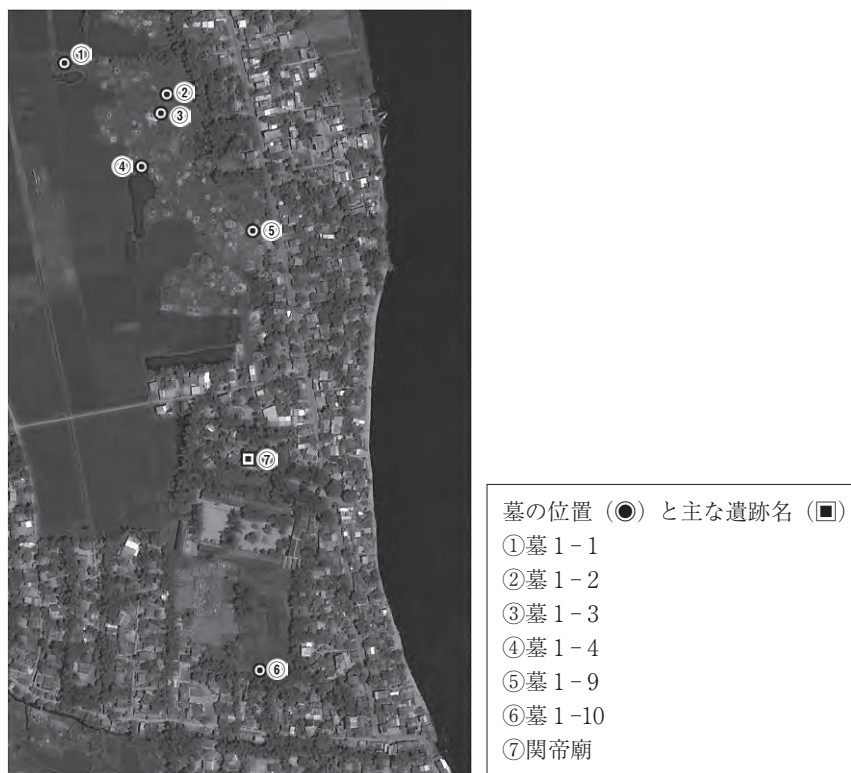


図3 (グーグルアースにて作成)

(1-1) 開耕偉績黎尊神墓（図篠原4、5、6）

<p>全長1380cm、全幅940cm 外周：方Ⅲ a型 入口方位：160° 埋葬主体部：D-2 被葬者：男 ビンフォン：③ 墓誌位置：奥（墓碑）</p>	<p>保大乙酉年孟夏 勅 翊保中興加贈端肅本土前開耕偉績黎尊神之墓 封 地霊社同 拜立</p>
---	---



図 4



図 5

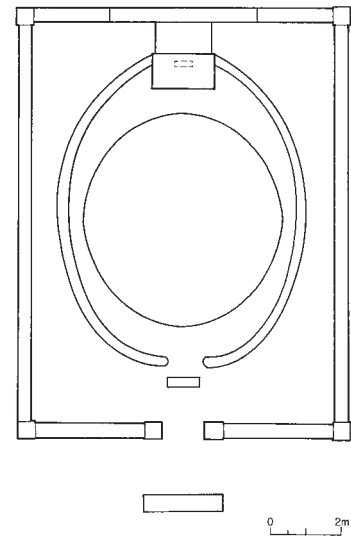


図 6

墓地の最も北西部に位置する。外周は二重で、方形の中に円形が設けられる。円形外周の先端には竜の頭をあしらった装飾があるが、この装飾は通常、男の墓には竜、女の墓には鳥（鳳凰か）が施される⁵⁾。円形の扉には「乙巳年」・「陽暦一千九百六十五年／地霊社同拜」の文字が施されており、1965年に加えられたことが分かる。わざわざ外周を二重にした理由は不明である。円形外周の奥には大きな祠を設け、その中に碑形の墓誌を収めている。方形の外周は磚積み、漆喰仕上げである。頂部には磚の連結に鉄製と思われる錠を用いた部分がある（露出部で確認）。

墓誌の「保大乙酉年」は1945年。黎文氏の『黎族尊譜』によると、第一世（第一前上世紀）の黎文誠⁶⁾であり、ディアリンを開耕した最初の人物であるという。

開耕祖であるためか、ディアリン（地霊、当時は「社」であった）全体による拜立である。

(1-2) 富義子開耕黎大郎墓（図篠原 7、8）

外周：方 I a 型 入口方位：200° 埋葬主体部：D-1 被葬者：男 ビンフォン：② 墓誌位置：奥壁	丁酉年秋 57 勅 宣大佐治功臣富義子開耕黎大郎之墓 封 地霊社同拜 立
---	--

墓前に大きな祭台が設けられている。『黎族尊譜』の墓地分布図（「黎族図式土墓」、『黎族尊譜』所収）によると、第一世の息子（第一中世紀）である。丁酉年は下部のアラビア数字から1957年であることが分かる。墓誌は奥壁（ビンフォン）の中央に碑を模した装飾を施し、その中に収められている。

5) 牙や嘴の有無、頸部の羽などで見分けられるが、それらがなく判別しがたいものもある。
 6) 彼の父が族譜でいう「始祖」となる。



図7



図8

(1-3) 勇亮伯開耕黎大郎墓 (図篠原9、10)

外周：方I a型 入口方位：170° 埋葬主体部：D-1 被葬者：男 ビンフォン：② 墓誌位置：奥壁	丁酉年秋 57 勅 純信謹礼功臣勇亮伯開耕黎大郎之墓 封 地霊社同拜 立
---	--

墓前に大きな祭台が設けられている。丁酉年は1957年。規模や型式は富義子開耕黎大郎墓とほぼ同じであり、両者は同じくして改修されたものと判断される。墓誌の配置は墓1-2と同様である。墓誌の銘文からは判別しがたいが、(1-2)と(1-3)は黎文誠の息子である黎文芳と黎文己の墓である。上記の3基はいずれもディアリンを開耕(開拓)した先人として勅封が与えられており、直系子孫ではなくディアリン(地霊)社全体で祭られている⁷⁾。



図9



図10

7) ディアリンのディン(亭)では、彼ら3人が城隍神、天依阿那演妃と共に祀られている。2009年の9月4日に祭祀の見学をすることができた。

(1-4) 效忠都騎尉范第三行墓（図篠原11、12、13）

全長980cm、全幅770cm 外周：方I b型 入口方位：180° 埋葬主体部：D-3 被葬者：男 ビンフォン：② 墓誌位置：墓前	辛酉年癸巳月乙丑日甲申吉辰造 敕授效忠都騎尉先嚴范第三行之墓 孝子 范文貴 同奉立 范文忠
--	--

埋葬主体部は土のマウンドで、形状は雑草により不明瞭である。

墓誌は塼を積み上げてから漆喰で外装を施した構造物の前面にはめ込まれている。辛酉年は1861、1921年が該当する。癸巳月は4月。1921年4月には乙丑日はなく、1861年4月なら7日目にあたる。甲申は15～17時に該当し、「吉辰」の辰は「時」の意で、忌諱である⁸⁾。ディアリンにおける調査では、最も古い墓誌に該当する。

「都騎尉」の官は『欽定大南会典事例』には見えず、似たものに襲蔭⁹⁾で授かる「騎都尉」（従四品）と、一般の武官である「敕授效忠騎尉」（正七品）¹⁰⁾がある。墓誌の「敕授」¹¹⁾からみて後者と考えるのが妥当であろう。「先嚴」（亡父）から立誌者は息子であることが分かる。墓は長期にわたって放置されており、無縁墓と思われる。同族がすでに別の地域に移ってしまったのかもしれない¹²⁾。



図11



図12

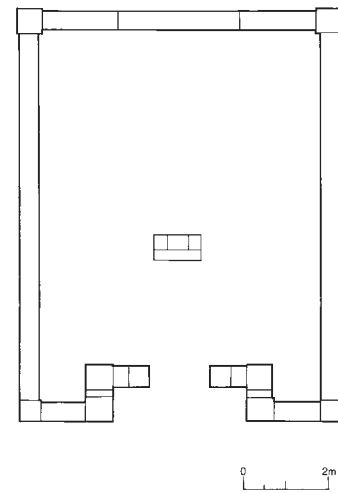


図13

- 8) 嗣徳帝（在位1848～1883）の諱である「（阮福）時」を避け、「辰」を使う例が見られるという（蓮田隆志氏の教示による）。
- 9) 『欽定大南会典事例』巻138、兵部、襲蔭。「嘉隆十六年…、又議準功臣子孫襲蔭、自一等功臣子孫至七等功臣子孫、蔭授輕車都尉・驍騎都尉・騎都尉・飛騎尉・奉恩尉・承恩尉、各有差」
- 10) 『欽定大南会典事例』巻137、兵部、官制、階制品級。「正七品、各局匠・正司匠、親兵・禁兵隊長・各保水師隊長・樂長・歌長、各省召募南兵正隊長千戸、各省揀兵正隊長、敕授效忠騎尉」
- 11) 5品以上には「誥授」、6品以下には「敕授」の語が用いられる。
- 12) ディアリンでは范族の家譜を閲覧することはできなかった。またバオヴィン地区の范族家譜を確認したが、文貴、文忠の名は見出せなかった。

(1-5) 范進思雨正室阮氏第六娘墓 (図篠原14、15)

被葬者：女	啓定元年十月十九日 左從頭考之靈 皇朝誥授武功都尉諡壯銳范進思雨正室阮氏第六娘之墓 右配頭妣之靈 嫡孫 范文愈拜立
-------	--

效忠都騎尉范第三行墓 (墓1-4) のすぐ東南にある。墓誌は祠の中にあり、数メートル前 (南) は下り傾斜をなして池となる。草が生い茂っており、この墓誌を伴う墓が近くには見出せなかった。

被葬者は范 (進) 氏と阮氏の娘。墓誌の啓定元年は1916年で、「誥授武功都尉」(正五品)¹³⁾ から墓主の父が武官であったことが分かる。すぐ北にある范氏との親族関係を連想させる。



図14



図15

(1-6) 范香溝継室黎進氏二娘墓 (図篠原16、17)

外周：方I a型 埋葬主体部：A-2 (2段) 被葬者：女 ビンフォン：③ 墓誌位置：奥壁	保大二年季夏 顯妣配為鴻臚寺鄉范香溝継室清河黎進氏二娘之墓 孝子 范世延 同 范嗣須 拜 范金□ 立
---	--

墓1-9の西南に位置する。主体部は2段で、上段が寄せ棟型をなす。墓誌は漆喰製で、文字のある部分のみ塗り替えた跡がある。墓誌の「鴻臚寺郷」は鴻臚寺卿を指すと思われる。保大二年は1927年で、立誌者は3人の息子であろう。

13) 『欽定大南会典事例』巻137、兵部、官制、階制品級。「正五品、都尉、三等待衛、親兵・禁兵該隊、各保水師該隊、祠祭武員、南北漕管領、防守尉、誥授武功都尉」



図16



図17

(1-7) 黄公正室阮氏墓（図篠原18、19）

埋葬主体部：D-3 被葬者：女 ビンフォン：④ 墓誌位置：墓後部	歳次乙亥年仲夏葬 大南皇朝靈江秀卞黄公正室阮氏之墓 孝女氏綏 同奉立 孝男文愨
---	---

外周とビンフォンを持たず、直径2mに満たないマウンドのみの墓である。乙亥年は1815、1875、1935年が該当する。地霊の黄族の家譜（『黄文尊族譜』）によると、被葬者は第5世黄文恵の妻である阮氏順（生没年不明）である。「孝女氏綏」は阮氏順の娘であるが、「孝男文愨」は順の実子ではなく、継室である阮氏蕙の息子である。



図18



図19

(1-8) 黄貴公・黎貴妃墓 (図篠原20、21)

外周：方I a型 埋葬主体部：D-2 被葬者：夫婦（双墓） ビンフォン：② 墓誌位置：奥壁	保大丙申年間 原 前朝敕授従九品頭考黄貴公之墓 従九品孺人黄公元配頭妣黎貴妃之墓 長 九品文誥 子 学生文怡 同拜 誌 百戸文松
---	---

第7世、黄文愿と夫人の墓¹⁴⁾。墓は夫婦のものが2基並んでいる。丙申年¹⁵⁾は1896、1956年に該当するが、保大帝の在位中（1926-1945）にはない。彼が退位して後、ベトナム国国長に在任していた期間（1949-1955）に近い1956年を指すものと思われる。



図20



図21

(1-9) 関公祠住持正覚霊塔 (図篠原22、23)

外周：方I b型 埋葬主体部：E 被葬者：男 ビンフォン：① 墓誌位置：墓前 (塔の正面にはめ込み)	啓定十年歳次乙丑春 御製関公祠住持臨濟正宗四十一世上清下威号正覚霊之塔 興和 积子 同造 立 興栄
---	---

僧侶の墓である。関公祠はディアリン村落南部にある関帝廟の呼称と思われる¹⁶⁾。啓定十年歳次乙丑は1925年。ディアリンの関帝廟には嗣徳14（1860）年の紀年が入った御製碑がある。

ビンフォンは外周（塀）の内側にあり、墓誌の面する方角に立てられている。ただ入口は墓誌の向く

14) 『黄文尊族譜』。

15) 丙申年の後にある「問（間）」の意味は不明。

16) 関帝廟については、野間晴雄・西村昌也ほか「ベトナムのフェ旧外港集落の天后宮と関聖殿の調査基礎報告」（『東アジア文化交渉研究』2、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2009）および本書の第1部第2章「フェ・フォンヴィン社旧外集落の天后宮と関聖殿の調査基礎報告」および「フォンヴィン社の天后宮と関帝廟での祭礼参加者調査」を参照。

方向とは別（右斜め前）に設けられている。この点からすると、ピンフォンは入口からの侵入を妨げるのではなく、主体部の正面を守るという意味が込められていることになる。

2010年3月の調査時には塔のみ（恐らくは造営当初の）上塗りされていた（墓誌写真は2009年8月のもの）。現在の視点から、美しく見栄えのするように配慮したものであろうか。他の古墓もそうであるが、改修に際しては外見の古めかしさにはとらわれないようである。



図22



図23

(1-10) 黎福貴公・阮氏貴妃妃墓（図篠原24、25、26）

<p>全長770cm（羨道170cm）、 全幅490cm 外周：円Ⅱ a型 入口方位：160° 埋葬主体部：D-2 被葬者：夫婦（合葬） ピンフォン：③ 墓誌位置：奥壁</p>	<p>保大己卯春 上世 高祖考黎福貴公 之墓 高祖妣阮氏貴妃 黎福族同奉 立</p>
--	--

ディアリンの共同墓地から離れた場所に、単独で存在する。外周の先には竜頭が施されている。夫婦合葬墓においては男性の性格が優先されるのであろうか。保大己卯年は1939年。黎福族の始祖墓との話であったが、家譜（『黎福族宗譜』）によると一世の妻は黎氏であり墓誌の阮氏ではない¹⁷⁾。また家譜には10世までの名が記されているが、名に福の字を冠していたのは5世までで、6世以降は黎長である。阮朝皇室の諱である「福」の字を避けたものであろうか。

ちなみにすぐ近くに中国人墓と伝わる墓があったが、遷葬された跡地であり、詳細は分からなかった。

17) 2世、3世の夫人は阮氏である。



図24



図25

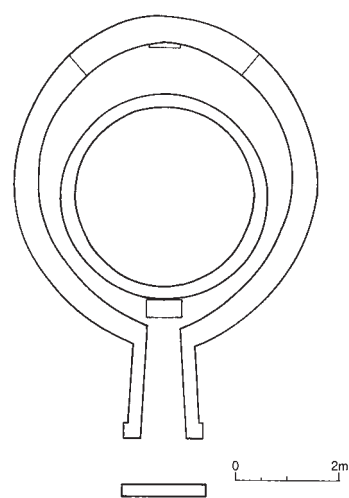


図26

(2) バオヴィンの古墓

バオヴィン地区はディアリン地区の南にあり、商区と農業区に分かれている。最も大きな共同墓地はバオヴィン村落の西北部に位置している（図篠原27）。その南には地表面が1～2m低い水田地帯が広がっているが、その中には水田の地表面より1～2mほど高い台地が点在しており、その台地上にも墓が造られている。この共同墓地には、バオヴィンを最初に開拓したとされる開耕三族（范・呉・黎）の墓がある¹⁸⁾。

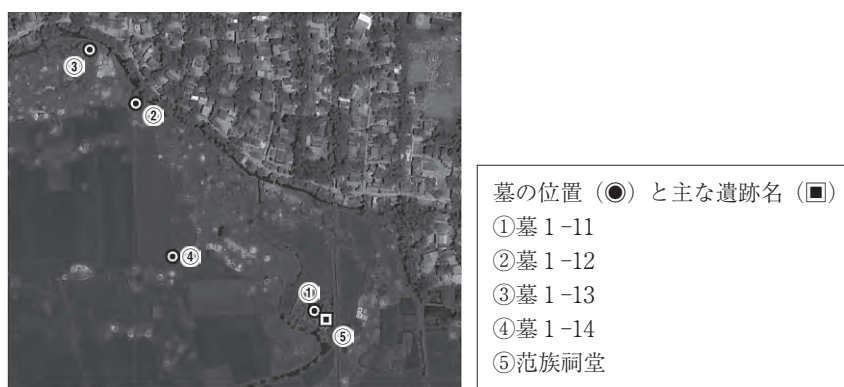


図27 (グーグルアースにて作成)

(1-11) 范族開耕祖墓 (図篠原28、29)

入口方位：ほぼ南
 埋葬主体部：D-2
 被葬者：男
 ビンフォン：②

18) 本紀要、井上論文を参照。

范族の集団墓地である。墓地が一族の祠堂に隣接する例は、我々の調査においてはこの1カ所のみであった。この集団墓地の墓はいずれも円形の主体部が配され、その外側に塀をめぐる。後部の塀にはピンフォンが設けられている。すべて近年に改修されたものであろう。また范族の墓地はここ以外にもあるようである。調査日（2009年9月1日）はちょうど范族祠堂において祭祀を行なう日で、その始終を見学することができた（図篠原30、31）。



図28



図29



図30



図31

(1-12) 呉族開耕祖墓（図篠原32、33）

埋葬主体部：D-2 被葬者：男 ピンフォン：②

バオヴィン墓地の中にある。墓誌は見えにくい「壬午年五月十九日吉時新造」とあり、2002年に改修したものと思われる。



図32



図33

(1-13) 黎族開耕祖墓 (図籐原34)

被葬者：男

同じく共同墓地の中にあるが、構造物が何もなく、生い茂る雑草のため墓（マウンド）も確認できなかった。改修のため一時的に取り払ったのであろうか。



図34

(1-14) 阮貴公・陳貴妃墓 (図籐原35、36、37、38)

全長703cm、全幅720cm 外周：方 I b 型 入口方位：ほぼ南 埋葬主体部：D-3 被葬者：夫婦（合葬） ビンフォン：④ 墓誌位置：墓前	保大辛未冬 坐辛向乙 高祖 考阮貴公 之墓 妣陳貴妃 阜元氏拜立	保大六年冬 壹東山后土之神 阜元氏拜立
--	---	---------------------------

水田内の台地に造られた墓。ほぼ正方形でビンフォンを持たない。入口は南辺の東側に位置する。東辺側には、東向きに墓誌と后土碑が設けられている。后土碑が外周の内部にあるのは、報告例の中で唯

一である¹⁹⁾。墓誌と后土碑の下を這う形で内周がめぐらされ、外周と内周の間には溝が設けられている。内周の内側は土で、中央に低いマウンドが一つ設けられている。墓誌からみて、夫婦合葬墓であろう。

墓誌の「保大六年」は1931年。縦書きで「阜元」とあるのは阮を指すのであろう。夫人は陳氏。「坐辛向乙」とは、おおよそ105° の方向を向くことを意味するが、四辺の向きと合致しない。主体部から南辺にある入口を向いた方向が東南に当たるが、これを指すのであろうか。また后土碑の「壹東山」がどこを指すのかは不明である。ピンフォンを持たない代わりに、后土碑がその役割を果たしているのであろうか。今回の調査報告では特殊な事例である。



図35



図36



図37

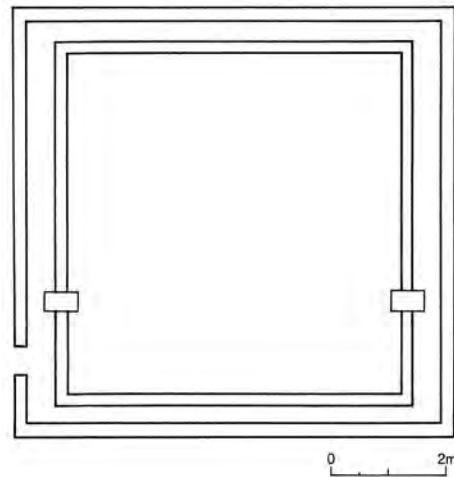


図38

19) 調査例とは異なるが、阮朝を開いた初代皇帝（嘉隆帝）の陵（天授陵）内の碑亭の近くに「后土之碑」が設けられている。

2) 明香陳氏の古墓

明香陳氏は、フェ市の北部郊外にあるミンフォン（明香）集落に住む華人系の一族。彼らには『明郷陳氏正譜』と呼ばれる家譜（以下『正譜』と称す）が伝わっている²⁰⁾。これによると、第1世陳養純（生没年1610～1688）が明代（17世紀）に、福建省漳州府竜溪県からこの地に到来し、代々医者や官職に就く者を輩出してきた。一族を大いに興したのは7世族長の陳養純（生没年1813～1883）で、嗣徳帝（在位年1848～1883）の知遇を得、踐誠の名を賜わり、官は欽差大臣、兵部尚書、工部尚書を歴任した²¹⁾。またこれ以来、陳氏の男子は踐の字を名に冠するようになった²²⁾。

ミンフォン（2010年3月現在）に在住するのは、10代目で陳族第2派に属し、ミンフォンに居残った一族の長老 Trần Nguyên Đãng さんで、現在もミンフォンの各種行事において指導者的役割を果たしている（図籐原39）。

墓地は一カ所ではなく、数基単位でフェ市内に散在しているが、調査できたのは4カ所である。調査した墓地はいずれもフェ市街地の南で、啓定帝陵の周辺にある（図籐原40）。選地には風水が影響を与えているものと思われる。以下、その内容と被葬者（墓主）の略歴について述べる。



図39



- 墓の位置 (●) と主な遺跡名 (■)
- ①墓 2-1、2-2
 - ②墓 2-4
 - ③墓 2-5
 - ④墓 2-6、2-7
 - ⑤墓 2-8
 - ⑥啓定帝陵
 - ⑦応順山廟

図40 (グーグルアースにて作成)

20) 陳荊和『承天明郷社陳氏正譜』（香港中文大学新亞研究所（東南亞研究專刊之四）、1964）

21) 『大南正編列伝』2集、卷32、諸臣列伝22、陳踐誠および『正譜』。諡は「皇朝戊戌科進士誥授特進榮録大夫輔政大臣文明殿大学士文誼公」。

22) 踐は本来、陳氏の諱に冠される名の一部であるが、姓の後につけて慣習的に陳踐と呼ぶこともあるようである。

(1) 陳氏墓地 1

案内をしてくれた Trần Văn Quyên 氏（フースアン大学講師）によると、墓の手入れは管理人を雇用して行っており、墓地の西北に広がる田は祭田（祭祀の料とする田）だと言う。

(2-1) 資善大夫礼部尚書莊懿公墓（図篠原41、42、43）

全長665cm（羨道195cm）、 全幅440cm 外周：円Ⅱ a 型 入口方位：280° 埋葬主体部：D-2 被葬者：男 ビンフォン：④ 墓誌位置：奥壁	嗣徳己卯孟秋 資善大夫礼部 尚書諡莊懿 陳尊公之墓 嗣子踐誠拜立
--	---

被葬者は陳族の第6世族長である莊懿公陳朝綱（字は伯亮）。生没年1776（黎朝・景興37）～1825（明命6）。香水県安旧社天台山（1825）→朱渚社泳娘処山（1872 [嗣徳25]）→香水県金竜社上坊山（現在の場所、1928 [保大3]）と2回の遷葬が行なわれたが、これは『正譜』に「上坊山の南、慈淑端人の墓の近く」とあるように、夫人墓に寄り添わせる措置であった。墓誌の「嗣徳己卯」は1879年で、1回目の遷葬地における記録である。



図41



図42

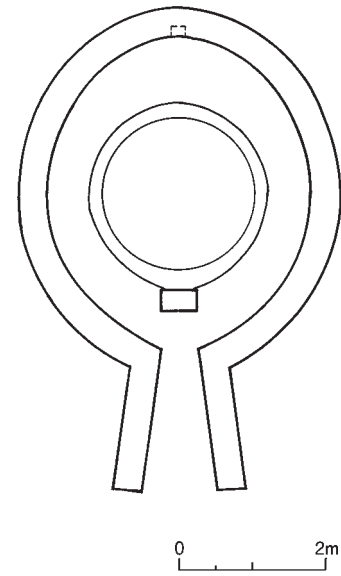


図43

(2-2) 慈淑端人林氏墓（図篠原44、45、46）

全長627cm、全幅442cm 外周：円Ⅱ b 型 入口方位：280° 埋葬主体部：C（2段） 被葬者：女 ビンフォン：① 墓誌位置：奥壁	嗣徳己卯孟秋 頭妣知府贈礼部尚書陳公元配 已封正三品淑人加 贈正二品端人 林氏大慈之墓 嗣子踐誠拜立
---	--

慈淑端人林氏（生没年1785～1870）は陳朝綱の夫人。主体部はいわゆる馬形であり、その前面の中央には、墓2-4と同様、四角形の枠が設けられている。またその前に設けられた祭台は高さ数センチ程度の低いものである。

嗣徳己卯は1879年。ただ彼女の死亡年から9年後にあたるため、この墓誌は少なくとも最初の埋葬と同時に造られたものではない。またこの墓誌は夫の墓誌の製作年が同じであるが、夫の墓が夫人墓の隣に遷されたのは、それから数十年後である。

墓誌の製作を考える上で示唆を与えるのは夫婦への「加贈」である。『正譜』によれば両者への加贈は「嗣徳三十二年七月初一日」に行なわれている。加贈は夫婦の息子である陳踐誠の国家への貢献によるものであろうか。



図44



図45

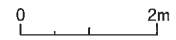
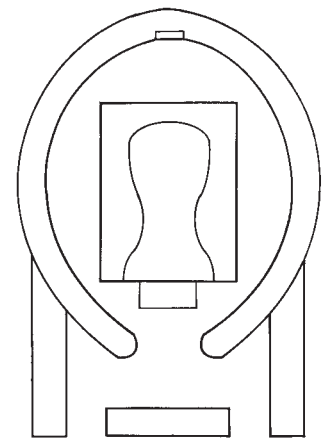


図46

(2-3) 無名墓1 (図篠原47)

外周：円Ⅱ a型
 埋葬主体部：B-1
 被葬者：不明
 ピンフォン：①



図47

(2-4) 無名墓 2（図篠原48）

外周：円Ⅱc型
 入口方位：280°
 埋葬主体部：C
 被葬者：不明
 ビンフォン：①



図48



図49

墓2-1、2-2のすぐ近くに墓誌のない墓があった。Quyén氏によると、これらは中国人墓であるという。明香陳氏は華人系であり、中国から嫁いできた女性の例も確認できるため、これらは明香陳氏の親族に連なる墓の可能性も考えられる²³⁾。

無名墓2は主体部の前面に墓誌を嵌め込む枠が設けられており、墓の背後には、小さな碑（高64.5×幅51×厚33）が立っていた（図篠原49）。文字はなかったが后土碑であろう。

(2) 陳氏墓地 2

(2-5) 慈淑孺人墓（図篠原50、51、52）

全長587cm、全幅480cm
 外周：円Ⅰ型
 入口方位：170°
 埋葬主体部：A-1（2段）
 被葬者：女
 ビンフォン：④
 墓誌位置：奥壁

清故 顯妣陳門諡慈淑孺人之墓
 孝男錫珍立石
 歲丁亥仲冬穀旦

3世族長、性善公陳宗の夫人で、姓は陳文、諱は臺、生没年1683（黎朝・正和4）～1766（黎朝・景興27）²⁴⁾。墓のすぐ東隣に后土碑がある。陳文という姓はベトナム系であろうか。

墓はもと広治省潘舎社麻多処にあったが、1812（嘉隆11）年3月、香水県朱渚社移泊山の嶺に遷葬された²⁵⁾。墓誌の「清故」の字は清から嫁いできた女性である可能性を考えさせるが、陳文の姓がベトナム系だとすると、「清故」が必ずしも清出身を意味するものではないということになる。立石者は慈淑孺人の第7子で4世族長の敏直公錫珍（生没年1715～1795）²⁶⁾。

23) 『正譜』によると、陳朝綱の妻は慈淑端人林氏ただ一人で、彼女には二人の娘がいた（葬地の記載なし）。娘の墓である可能性も考えられよう。

24) 陳荊和（前出書）、47頁。「孺人姓陳文氏、諱臺、癸亥年（清康熙二十二年黎正和四年）吉月辰牌誕生、享寿八十四歳、丙戌年（清乾隆三十一年黎景興二十七年）四月初七日吉牌卒…」

25) ちなみに夫（性善公陳宗）の墓は「広治省潘舎社」にある（『正譜』、46頁）。『正譜』に遷葬の記録はなく、夫人の墓のみ葬地を遷したものと考えられる。

26) 彼も1879（嗣徳32）年に「中順大夫・翰林院侍読学士（正四品）」を贈られている。また彼の父である性善公には8人の子がおり、第1子が最初の夫人游氏の所生（游氏とは後に離縁）である。陳荊和（前出書）、13頁。

墓誌の「丁亥年」には1767年、1827年が該当するが、この場所に墓が遷された時には錫珍はすでに死亡しており、また嘉隆年間には丁亥年はない。よって丁亥年は錫珍の生前にあたる1767年で、夫人が逝去した翌年であり、この場所に遷葬される前のものとなる。現存の墓誌が以前の墓から一緒に移されたものであるかどうかは定かではないが、墓がその地に造られた年代を必ずしも指すわけではないことになる。



(3) 陳氏墓地 3 図50



図51

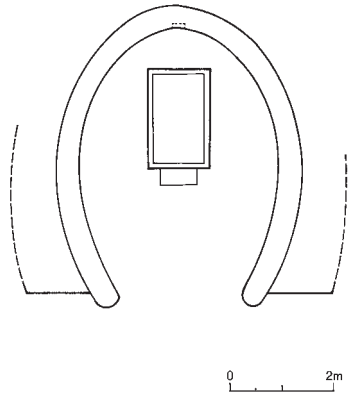


図52

(2-6) 陳竹隱先生墓 (図篠原53、54、55)

全長772cm、全幅500cm 外周：円Ⅱc型 入口方位：330° 埋葬主体部：C(2段) 被葬者：男 ビンフォン：① 墓誌位置：奥壁	甲戌年夏月吉旦 越 清河処士陳竹隱先生之墓 故 孝子 朝緇 朝綿 同立 朝緯 朝綽
---	--

第5世族長陳士益(字は進之、号は竹隱堂、諡は温穆公)の墓。生没年1748(黎朝景興9)~1814(阮朝嘉隆13)で、墓誌の甲戌は死亡年にあたる。『正譜』には一度遷葬された(年代は不明)とあるから、墓誌は現在の地に移される前のものであろう。また1880(嗣徳33)年7月に嘉議大夫詹事譜詹事を特贈されているが²⁷⁾、墓誌は処士つまり無官とあって生前の地位のまま、加贈によって墓誌が新たに製作されることはなかった。

27) 陳荊和(前出書)、61頁



図53



図54

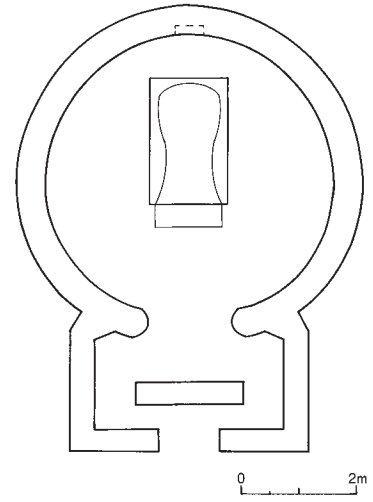


図55

(2-7) 陳門正室高宜人墓（図篠原56、57、58）

<p>全長718cm（羨道182）、 全幅506cm 外周：円Ⅱ a型 入口方位：330° 埋葬主体部：D-2 被葬者：女 ピンフォン：① 墓誌位置：奥壁</p>	<p>清 乙巳年孟秋穀旦 顯妣依夫内侍翰陳門正室高宜人之墓 故 哀子 朝綏 同立 朝緯</p>
---	---

5世族長陳士益（墓2-6）の正室で、諱は璋²⁸⁾、生没年1752（黎朝・景興13）～1785（黎朝・景興46）。墓誌の「乙巳年」が1809年、1869年のいずれに当たるかは不明。福州高一籌の仲女とあり、清から嫁いできた人物であろう。初葬地は御屏山であったが、この地に遷葬された²⁹⁾。立誌者の朝綏（莊懿公）、朝緯はともに彼女の実子である。

28) 一名に「高張」という。陳荊和（前出書）、63頁

29) 陳荊和（前出書）、63～64頁



図56



図57

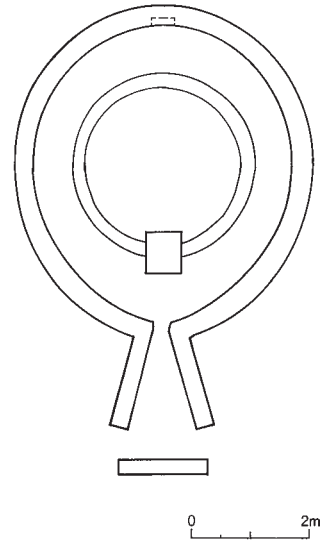


図58

(4) 陳氏墓地 4

(2-8) 阮侯正室陳氏夫人墓 (図篠原59、60)

外周：円Ⅲ型 入口方位：250° 埋葬主体部：C 被葬者：女 ビンフォン：① 墓誌位置：墓前	歳在上章敦牂六月穀日 越 頭妣阮侯正室陳氏夫人之墓 故 孝子拜立
---	--

Quyén 氏の話では、明香陳氏に由来のある者ということであった。かなり大型（全長、全幅ともに10m超）で実測値は出せなかった。円形の外周が二重にめぐらされ、外側の外周から前方に伸びた枠は方形をなして墓域を形成し、中央はビンフォンによって塞いでいる。大型ゆえに別途に分類したが、基本的には円Ⅱcと同様であろう。前方の柱に設けられた獅子像や主体部の文様など、多くの装飾が施されている。

墓誌は墓2-4と同様、主体部の前面に設けられた枠内に収められている。上部に「越故」とあるためベトナム人であることを予想させるが、「清故」と記された人物が清からやってきたことを示すのであれば、華人系であってもベトナム生まれの人物は「越故」と記される可能性もあり、断定しがたい。「上章敦牂」は庚午の意で、1750年、1810年、1870年、1930年が該当する。年代の手がかりとなるのは「阮侯」の文字である。彼女がもし明香陳氏の一門であるとすれば、阮族に嫁いだ女性ということになる。『正譜』によると、以下の人物が見出せた。

- ① 5世温穆公第7女：生没年1784～1820
- ② 7世文誼公長女：1838生（死亡年不明）

③ 7世文誼公第14女：生没1855年³⁰⁾（嗣徳8）～1929年（保大4）。阮氏に嫁いたが離縁し、張氏に嫁いで二人の娘を生んだ。

①は後述の阮科族に嫁いだ人物で、阮科族墓地に墓（3-11）があるため除外される。③は阮氏との離縁後張氏に嫁いでいるから、墓に阮氏正室とあるのは不自然である。②は正譜に「生子早卒」とあり、墓誌に言う孝子が立誌者となり得たかどうか疑わしい。いずれにせよ、現時点では被葬者を明香陳氏と特定するのは困難である。



図59



図60

3) 阮科族の古墓

市街地の南、御屏山の東南に位置する（図篠原61、62）。フィールドワークの調査地域からはやや離れるが、歴代の墓が群集して墓地をなしており、通訳の方によるとフエ市の文化財に指定されているという。墓地はおおよそ東西に広がっており、東北の隅に「后土」碑を納めた小さな祠がある（図篠原63）。個別の墓に伴う后土碑はなく、墓地全体の后土碑の意味で設けられたものと考えられる。墓地は他にもあるかもしれないが、調査はこの1カ所のみで行ない、その一部（17基）を調査することができた。以下、調査した墓を代数順に記す。

墓の前部には、ビンフォンのような構造物があり、被葬者の名がクオックゲー表記された板（漆喰）がはめ込まれたものが多い（漢字名は無し）。この構造物の形状は、他地域の墓のビンフォンと異なり、あまり高くなく厚みがあって祭台のようにも見える。ただこれがない墓は被葬者の名がクオックゲー表記された板が別の場所にはめ込まれており、構造物が板をはめ込む目的で設けられたわけではない。従って本稿では一応これらをビンフォンと理解することにした。

家譜の閲覧ができなかったため、被葬者の情報はさほど得られなかったが、著名な人物については阮朝の正史から補っている。

30) 『正譜』にはまた道光34年ともあるが、道光年間には1821～1850の30年間で34年は存在しない。

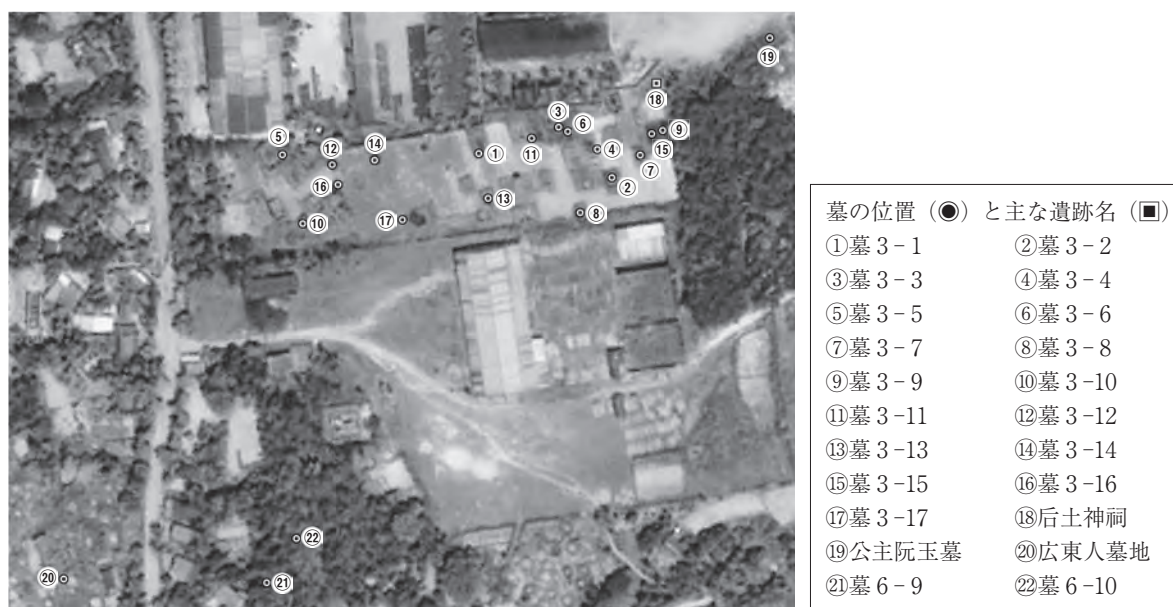


図61 (グーグルアースにて作成)



図62



図63

(1) 3世墓

(3-1) 景禄伯正室黎宜人墓 (Lê Thị Am, 1640-1711) (図篠原64、65、66)

全長510cm、全幅436cm 外周：方I a型 入口方位：170° 埋葬主体部：B-1 (3段) 被葬者：女 ビンフォン：③ 墓誌位置：奥壁	正堂勾稽景禄伯正室黎宜人墓
---	---------------

案内板によると Nguyễn Khoa Danh の妻である。同時代は後期黎朝にあたる。



図64



図65

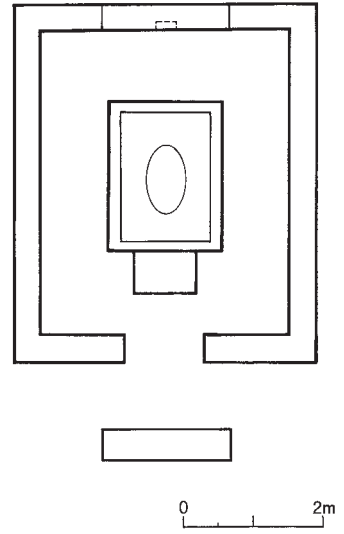


図66

(2) 5世墓

(3-2) 昭才伯墓 (Nguyễn Khoa Hiệp, 1694-1757) (図篠原67、68、69)

全長800cm、幅530cm 外周：方I a型 入口方位：170° 埋葬主体部：B-2（2段） 被葬者：男 ビンフォン：① 墓誌位置：奥壁	正宮知簿昭才伯之墓
---	-----------

奥壁にビンフォンなし。また墓誌は1行で、幅が非常に狭い。被葬者の詳細は不明。



図67



図68



図69

(3-3) 昭才伯正室陳氏墓 (図篠原70、71、72) (Trần Thị Luu, 1699-1751)

全長733cm、幅558cm 外周：方I a型 入口方位：170° 埋葬主体部：B-2（2段） 被葬者：女 ビンフォン：① 墓誌位置：奥壁	正堂知簿昭才伯正室陳氏之墓
---	---------------

Nguyễn Khoa Hiệp (墓3-2) の妻である。



図70



図71

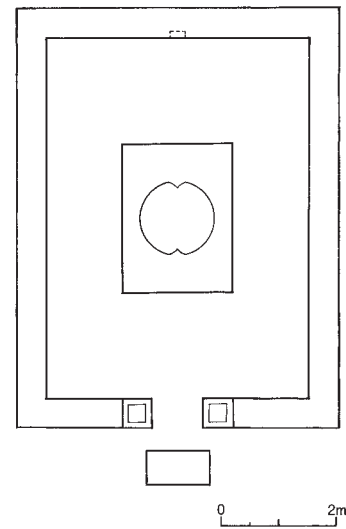


図72

(3) 6世墓

(3-4) 憲章侯墓 (図篠原73、74、75) (Nguyễn Khoa Thuyền, 1724-1789)

全長551cm、幅477cm 外周：方I a型 入口方位：170° 埋葬主体部：B-1（2段） 被葬者：男 ビンフォン：③ 墓誌位置：奥壁	参政憲章侯之墓
---	---------

『大南一統志』巻3（承天府中、人物）に登場する「隆湖營該簿阮科詮」と思われる。『大南一統志』には隆湖營と竜湖營の両方が見えるが、同じ地名であるのかどうかははっきりとしない³¹⁾。

31) ちなみに竜と隆の音は同じ「long」である。



図73



図74

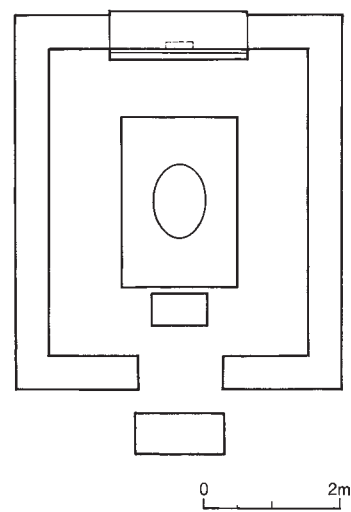


図75

(3-5) 憲章侯正室陳恭人墓（図篠原76、77）（Trần Thị Xuân、1723-1768）

外周：方Ⅲb 入口方位：ほぼ南 埋葬主体部：B-1（2段） 被葬者：女 ビンフォン：② 墓誌位置：奥壁	竜湖宮該簿憲章侯正室陳恭人之墓 孝子 阮科經 同立石 阮科禎
--	--

阮科暄の正室。外周は方型と円型の二重で、かなり大型である。



図76



図77

(3-6) 憲章侯次室林氏墓 (図篠原78、79、80) (Lâm Thị Các, 1751-1804)

全長793cm、幅730cm 外周：円I型 入口方位：170° 埋葬主体部：D-2 被葬者：女 ビンフォン：④ 墓誌位置：奥壁（立て掛け）	参政憲章侯次室林氏贈淑人之墓 孝子阮科叡立石
---	---------------------------

阮科叡の次室。外周は割石積みで漆喰による処理は行なわれていない。主体部の外側には段差が付けられている。墓誌は奥に立て掛けてあり、案内板は墓前の祭台に刻まれている。全体的に新しいが、老朽化により作り直したのであろうか。



図78



図79



図80

(3-7) 憲章侯懿室武夫人墓 (図篠原81、82、83) (Võ Thị Uyên, 1740-1805)

全長534cm、幅430cm 外周：方I a型 入口方位：170° 埋葬主体部：A-1（2段） 被葬者：女 ビンフォン：③ 墓誌位置：奥壁	参政憲章侯懿室武夫人之墓
---	--------------

阮科叡の妻。



図81



図82



図83

(4) 7世墓³²⁾

(3-8) 戸部尚書阮府君墓（図篠原84、85、86）（Nguyễn Khoa Minh、1778-1837）

全長849cm、幅539cm 外周：方Ⅱc型 入口方位：170° 埋葬主体部：B-1（3段） 被葬者：男 ピンフォン：③ 墓誌位置：奥壁	太子少保協弁大学士領戸部尚書阮府君之墓 孝子昱立石
--	------------------------------

阮科明である。『大南正編列伝二集』および『大南一統志』に伝あり。357～358頁。協弁大学士、太子少保、領戸部（尚書）は、1836（明命17）年に授けられたものである³³⁾。



図84



図85

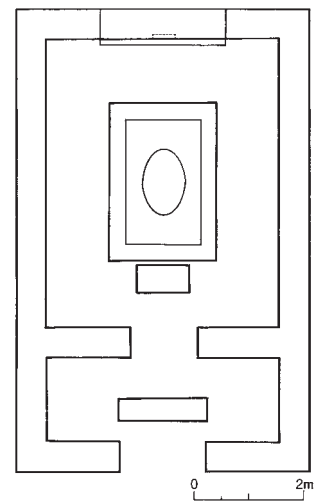


図86

32) 第7世から阮朝の官僚が登場する。

33) 『大南正編列伝二集』巻14、阮科明。一方『大南一統志』（巻3、承天府中、人物、阮科明）には「太子太保」とある。

(3-9) 戸部尚書阮正室陳夫人墓 (図篠原87、88、89) (Trần Thị Huyền, 1778-1850)

全長826cm、幅440cm 外周：方Ⅱ a型 入口方位：170° 埋葬主体部：B-1 (3段) 被葬者：女 ビンフォン：③ 墓誌位置：奥壁	太子少保協弁大学士領戸部尚書阮正室陳夫人之墓 孝子阮科学立石
--	-----------------------------------

阮科明の正室。埋葬主体部は3段からなり、最上段は半球形をなす。前面に祭台を設ける。墓誌は紀年が入っておらず、見た目も新しい。墓よりも後に製作されたものと思われる。

興味深いのは、前面両端から前方にまっすぐ伸びた塀とビンフオンの内部にもう一つ墓（主体部）が設けられている点である。墓は右側（向かって左側）に配され、墓誌はクオックグー表記で内容は不明であるが1964年のアラビア数字がある。墓3-9の被葬者にゆかりのある者であろうか。



図87



図88



図89

(3-10) 戸部尚書次室阮貴娘墓 (図篠原90、91、92) (Nguyễn Chi Mai, Thọ 85 Tuổi)

全長672cm、幅430cm 外周：方Ⅱ a型 入口方位：140° 埋葬主体部：B-1 (3段) 被葬者：女 ビンフォン：③ 墓誌位置：奥壁	歲丙寅孟春月庚午日 太子少保協弁大学士領戸部尚書次室贈恭人阮貴娘之墓 駙馬都尉科検 立石
--	--

阮科明の次室。案内板に享年85歳とある。丙寅年は1866年と思われる。

フエの古墓資料調査（篠原）



図90



図91



図92

(3-11) 戸部尚書阮継室陳夫人墓（図篠原93、94、95）（Trần Thị Liễu, 1844-1880）

<p>全長611cm（羨道193cm）、 幅410cm 外周：円Ⅱ a型 入口方位：170° 埋葬主体部：B-1（2段） 被葬者：女 ピンフォン：② 墓誌位置：奥壁</p>	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;"> <p>太子少保協弁大学士領戸部尚書阮継室陳夫人之墓 孝子阮科昱拜立</p> </td> </tr> </table>	<p>太子少保協弁大学士領戸部尚書阮継室陳夫人之墓 孝子阮科昱拜立</p>
<p>太子少保協弁大学士領戸部尚書阮継室陳夫人之墓 孝子阮科昱拜立</p>		

阮科明の継室。陳夫人は、明香陳氏の第5世族長である陳士益（温穆公、墓2-6）³⁴の第7女である。

34) 明香陳氏の古墓を参照。



図93



図94

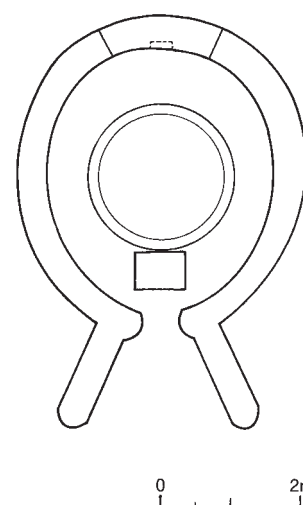


図95

(3-12) 戸部尚書阮懿室陳娘墓 (図篠原96、97、98) (Trần Thị Hoa, Thọ 52 Tuổi)

外周：方I a型 入口方位：ほぼ南 埋葬主体部：A-1 (2段) 被葬者：女 ピンフォン：③ 墓誌位置：奥壁	協弁大学士領戸部尚書阮懿室陳娘之墓
---	-------------------

阮科明の妻。享年52歳 (生没年不詳)。立誌者の名が無いのは、墓誌が後代に立てられたためか。



図96



図97



図98

(5) 8世墓

(3-13) 按察使阮府君墓（図篠原99、100、101）（Nguyễn Khoa Duc, 1808-1860）

全長661cm、幅446cm 外周：円Ⅱ a型 入口方位：150° 埋葬主体部：B-1（3段） 被葬者：男 ビンフォン：② 墓誌位置：奥壁	広安省按察使阮府君之墓 子 科謙 立石 科讓
---	----------------------------------

阮科昱（Nguyễn Khoa Duc）である。墓前の案内板には7世（Mộ Tô Đồi 7）となっている。だが『大南一統志』によると彼は7世である阮科明の息子であり、夫人の「広安省按察使阮府君正室黎氏之墓」の墓前には8世とあるから、案内板の誤りであろう。阮科明の伝に彼の業績も記されている（『大南一統志』巻3、『大南正編列伝第二集』巻40）。



図99



図100

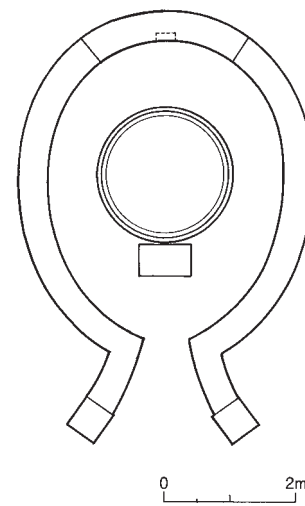


図101

(3-14) 按察使阮府君正室黎氏墓（図篠原102、103、104）（Lê Thị Cai, Thọ 61 Tuổi）

外周：方Ⅰ a型 入口方位：南東 埋葬主体部：A-1（2段） 被葬者：女 ビンフォン：② 墓誌位置：墓前	歳次戊辰孟秋吉旦 広安省按察使阮府君正室黎氏之墓 子科謙科讓拜立
---	--

外周（塀）が非常に低いのが特徴。被葬者は阮科昱の妻。戊辰は1868年、1928年が該当するが、夫の生没年からみて1868年が妥当であろう。案内板には享年61歳とある（Thọ 61 Tuổi）。享年が家譜に基づいているとすれば数え年の可能性が高く、生年は1808（嘉隆7）年となろう。



図102



図103



図104

(3-15) 奉誠大夫安仁知府阮府君墓 (図篠原105、106、107) (Nguyễn Khoa Học, 1811-1876)

<p>全長770cm、幅535cm 外周：方Ⅱb型 入口方位：170° 埋葬主体部：B-1（3段） 被葬者：男 ビンフォン：③ 墓誌位置：奥壁</p>	<p>丙子年十一月庚子五月壬申甲辰牌安厝 皇朝誥授奉誠大夫安仁知府阮府君之墓 嗣子 科講科論 敬豎 科訓科話</p>
---	---

3-9に登場する阮科学である。丙子は彼の死亡年である1876年に該当する。誥授奉誠大夫、知府はいずれも従五品。



図105



図106

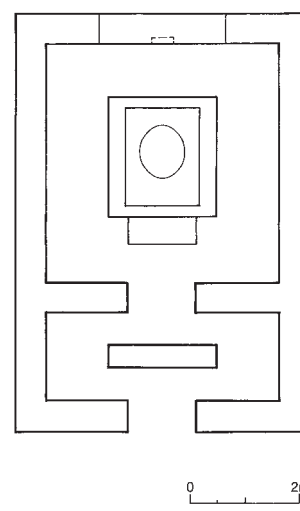


図107

(3-16) 駙馬都尉阮侯墓（図篠原108、109、110）（Nguyễn Khoa Kiêm, 1825-1885）

全長705cm、幅419cm 外周：方Ⅱ a型 入口方位：140° 埋葬主体部：A-2（2段） 被葬者：男 ビンフォン：③ 墓誌位置：奥壁	成泰癸巳春月吉日 顕考文臣駙馬都尉阮侯諡剛邁之墓 科詩拜立
---	-------------------------------------

被葬者は墓3-10の立石者である阮科検。駙馬都尉とは公主の婿に与えられる官と思われるが、はっきりとしたことは分からなかった³⁵⁾。



図108



図109



図110

(6) 世代未詳

(3-17) 潤沢侯次室阮氏墓（図篠原111、112）

全長642cm、幅458cm 外周：方Ⅰ a型 入口方位：130° 埋葬主体部：A-1（2段） 被葬者：女 ビンフォン：③ 墓誌位置：墓前（墓碑）	皇 歲次壬申孟夏月穀旦 依夫平順鎮記録潤沢侯次室諡端静阮氏之墓 越
---	--

案内板がなく世代は不明であり、従って壬申年（1752、1812、1872、1932）のいずれが該当するのかも分からない。墓誌は阮科族墓地の報告例では唯一碑形をなす。

35) 『欽定大南会典事例』巻76、礼部8、冊立公主の中に「駙馬」が登場するが、これが駙馬都尉であるのかどうかは確認できなかった。



図111



図112

4) 阮朝皇室に由来する古墓

調査の過程で、阮朝皇室につらなる者の墓も調査できた。以下、その概要を述べる。

(4-1) 尊嬪昭儀慈敏陳列夫人墓 (図篠原113、114、115)

外周：方Ⅳ型 入口方位：ほぼ南 埋葬主体部：A-1（3段） 被葬者：女 ビンフォン：② 墓誌位置：墓前（墓碑）	墓之人夫列陳敏慈儀昭贈嬪貴故越（題額）
--	---------------------

慈孝寺の裏手にある（位置は〔図篠原128〕を参照）。広南阮氏期の国王、阮福濶（生没年1714-1765）の夫人³⁶⁾で、姓は陳、諱は麴、法名は海法³⁷⁾。墓は内外二つの周を有し、主体部は3段の方形をなす。大型で、一辺が数十メートルに及ぶため実測はできなかった。主体部と門、そして墓誌（碑）が南北一列に並ぶ。ビンフォンは外周に付く。

碑形の墓誌は、碑身（碑首含む）265cm × 幅175cm × 奥行26cm、台座高約40cm（筆者実測値）。碑首の下に題額が入る。誌（碑）文は碑陽（前面）のみで、題が1行、誌が一行56字（最大）×19行、銘が3行である。長文で刻字も鮮明であるため、写真を掲載しておく（図篠原176、177、178、179）。

36) 『大南列伝前編』巻1、第1、后妃列伝、陳貴人に伝がある。

37) 墓誌による。



図113



図114



図115

(4-2) 公主阮氏玉墓（図篠原116、117、118）

外周：方Ⅳ型 入口方位：60° 埋葬主体部：A-1（2段） 被葬者：女 ビンフォン：③ 墓誌位置：墓前（墓碑）	丙寅季冬穀日 皇越前朝第七行公主阮氏玉之墓 孝子宋福謹誌
--	------------------------------------

阮科族墓地の後土碑からさらに奥（東北）に入った場所にある大型の墓³⁸⁾。内外二つの周を有し、外周の一辺は10mを超える。主体部は2段の方形をなす。墓誌の前にある磚積み構造物は碑閣の可能性が有る。

丙寅年は1806、1866、1926年。墓誌に記載された被葬者の姓から広南阮氏期もしくは阮朝の公主であることが分かる。立誌者の名から、被葬者が宋氏に嫁いだことが分かる。

阮朝においては皇子や公主の墓は「寝」と表現されるのが一般的だが、この墓誌は「墓」とある。その点では広南阮氏期の可能性もあるが、「皇越」の文字があり、にわかには断定しがたい。ただ墓に対し墓誌の状態が良好であり、墓誌のみ後代に作り直された可能性がある。現時点では人物の特定は困難である。

38) 位置は阮科族古墓（図篠原61）を参照。



図116



図117



図118

(4-3) 同富公主墓 (図篠原119、120)

全長約700cm、全幅約500cm 外周：方I a型 埋葬主体部：A-1（2段） 被葬者：女 ビンフォン：② 墓誌位置：墓前（墓碑）	維新九年十二月吉日 皇朝同富公主諡美淑之寢 孝子陳光楨奉立
---	-------------------------------------

フェ市街地の西南に万福寺という寺があり³⁹⁾、その奥に設けられた墓地の隅に位置する。墓誌は碑形で碑閣内に収まっている。「維新九年」は1915年、「陳光楨」からは公主が嫁いだ先が陳氏であることが分かる。美淑は公主の諡としてよく使われるようで、『大南正編列伝二集』からも数例を見いだすことができた。墓の外周やビンフォンは、造営当時のものとは考え難く、一部を除き改修されたようである。



図119



図120

39) 万福寺の位置は図1を参照。

(4-4) 安福郡王墓（図篠原121、122、123、124）

全長約820cm、 全幅約500cm 外周：方Ⅱc型 埋葬主体部：A-3（4段） 被葬者：男 ピンフォン：③ 墓誌位置：墓前（墓碑） 備考：神道碑あり	啓定二年孟秋吉葬 親藩兼撰尊人府右尊人安福郡王諡莊恭之寢 孝子 膺弁奉祀
--	---

万福寺に向かう道の途中にある。墓誌は石製の碑形で、碑閣内に収まっている。碑閣は、屋根が二重（重檐）で、高い大棟を有する。10mほど前方に神道碑（甲辰年孟春大須／安福郡王之墓／孝子膺弁奉立）を備えている⁴⁰⁾。主体部は4段からなり、最上段の四辺は、庇のように第3段の外に広がっている。墓4-5のような屋根（家形）を意識したものか。

被葬者は安福郡王洪健⁴¹⁾で、紹治帝の第十子、生没年1837（明命18）～1895（成泰7）。1899（成泰11）年に安福郡王に追封され、莊恭の諡を得た。墓誌は1917（啓定2）年の立であるが、追封の年とも無関係であり、改修の理由は不明である。立誌者の膺弁⁴²⁾は長子である。近くにもう一つ古墓があったが草に覆われており調査できなかった。



図121

40) 年代は新しいと思われる。

41) 『大南正編列伝二集』巻8、安福郡王洪健。

42) 列伝には「膺昇」、神道碑には犁とあるが、同字であろう。



図122



図123

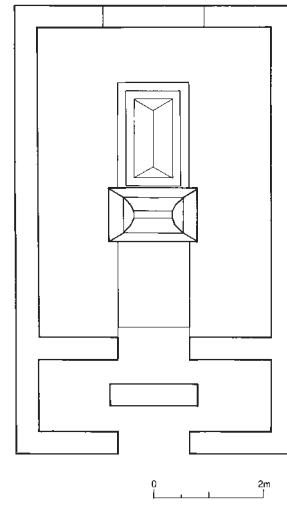


図124

(4-5) 二階観妃陳登氏墓 (図篠原125、126、127)

全長約800cm、全幅約550cm 外周：方Ⅱc型 入口方位：100° 埋葬主体部：A-3 (家形) 被葬者：女 ビンフォン：③ 墓誌位置：墓前 (墓碑)	戊辰仲春吉日 前朝二階観妃陳登氏 ^初 金諡懿順之寢 嗣孫永垂奉 誌
---	--

慈孝寺の裏手、墓4-1 (尊嬪昭儀慈敏陳列夫人墓) からさらに奥に入った場所にある。主体部は家形で装飾性が高く、四隅の柱は西洋建築の影響を思わせる。また墓の左 (北側) に、墓と同じ方位を向く碑があった。文字は読めなかったが「后土碑」であろう。

墓誌は碑形で碑閣内に収まっている。戊申年は1868、1928年が該当するが、現時点では特定し難い。立誌者は阮氏か、皇室につらなる姓を持つ者であろう。



図125



図126



図127

5) 慈孝寺の宦官墓

慈孝寺は、フエの南にある寺（図篠原128）。『大南一統志』（巻2、承天府上、寺観）によると、慈孝寺はこの地（楊春社）にあった古寺を前身とし、紹治二（1842）年、宮監であった朱福能が財をはたいてこれを重修し、皇帝から慈孝寺の扁額を賜ったという。同寺には多くの宦官（太監）墓があり、宦官の墓地を造ることになった大まかな経緯は「賜慈孝寺墓地碑記」（1901〔成泰13〕年）に記されている。通訳者の話では、政府とのつながりが強く、一般人は近年まで立ち入りが困難であったという。

宦官は法名を与えられた者とそうでない者がいるが、信仰や布施の差に起因するものであろうか。また法名はほとんどが「清」の字を冠しているのも特徴である。

寺には宦官墓だけでなく、僧墓（塔）や一般人の墓も点在しているが、すべてを調査することはできなかった。ここでは同寺の特徴とも言うべき宦官墓地2カ所を紹介しておく。

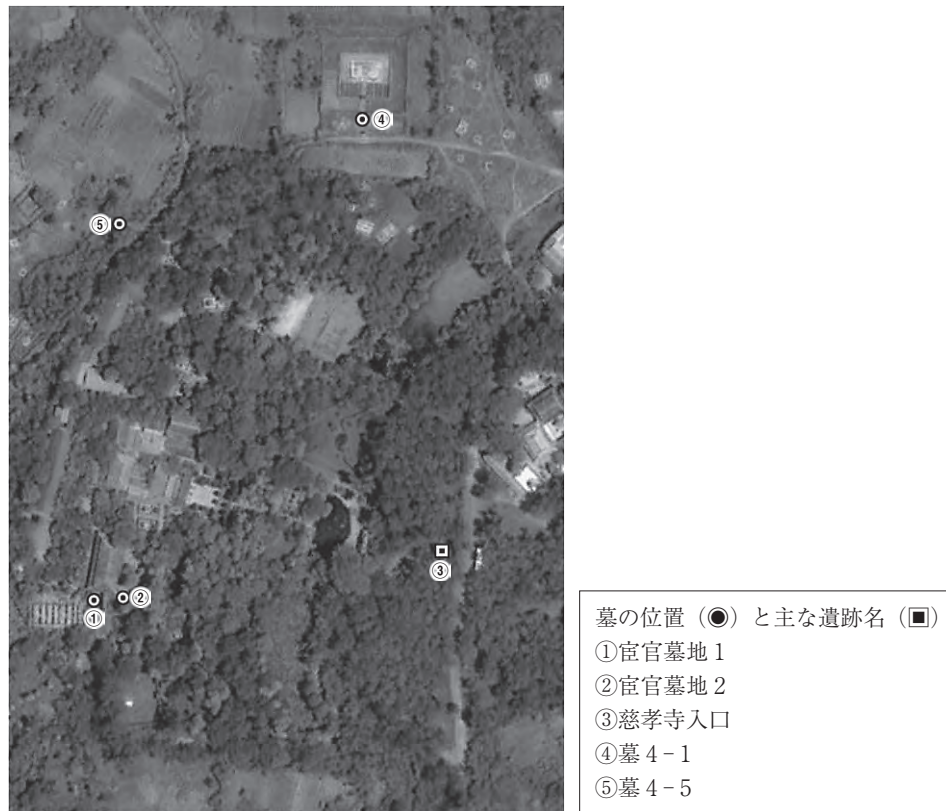


図128 (グーグルアースにて作成)

(1) 宦官墓地 1

墓地は高い塀によって仕切られており、前方（東側）には三つの門があり、後方（西側）にはベンフオンが設けられている。その内部に宦官墓が配されている（図篠原129、130）⁴³⁾。埋葬主体部はA-1式（2段）で（例外は後述）大きさはいずれも250×150cm前後。墓前に祭台（いずれも60×100cm前後）を模した構造物を設け、その上に碑形の墓誌を建てている。大きさには若干の違いがあるが、型式がほ

43) 図面内の番号は墓の番号に対応。点線のものはずのみが設けられ、墓のないものを指す。

ほぼ同じであるため分類はしなかった。墓誌は埴造の墓石の上に漆喰を塗り、文字を刻むものが多く、石製もある。墓誌の大きさや意匠、碑文の体裁は一様ではない。



図129

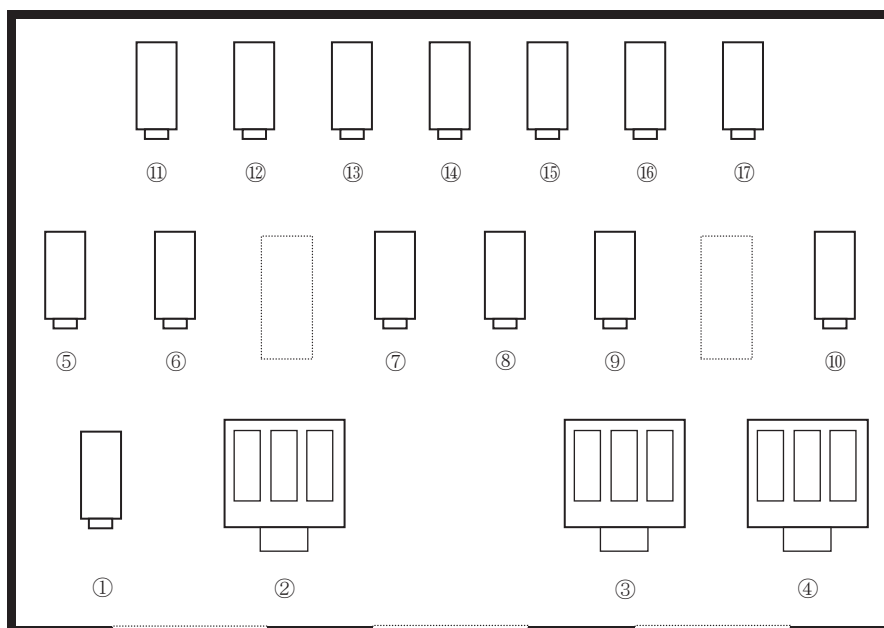


図130

(5-1) 呉智墓 (図篠原131)

太監供事呉智之墓



図131

(5-2) 楊乙・阮徳・阮馮養墓（図篠原132）

太監供事楊乙之墓
太監阮徳之墓
太監供事阮馮養之墓

図17-129の墓。3人の墓が連接され、墓誌に3人の名が並記されている。



図132

(5-3) 呉和・陳科墓（図篠原133）

太監呉和之墓
太監陳科之墓

埋葬主体部が3基並んでいるが、墓誌には2人のみの名が記されている。



図133

(5-4) 陳言・范任墓（図篠原134）

太監陳言之墓
太監范任之墓

埋葬主体部が3基並んでいるが、墓誌には2人のみの名が記されている。



図134

(5-5) 段討墓 (図篠原135)

太監承佐段討之墓



図135

(5-6) 武仲甫墓 (図篠原136)

保大十七年春		
皇	勅授承佐太監武仲甫字有政府君	之
朝		墓
	廣南 奠君府 兄弟並衆侄奉立石	
	峯五社	

保大十七年は1942年。大理石製である。



図136

(5-7) 黎氏法名清律墓 (図篠原137)

広義省平山府竜江社	
皇朝勅授検帑太監黎貴公法名清律之墓	
甲戌年七月十八日	謝世

甲戌は1874、1934年だが、墓地1の墓は啓定～保大年間のものが大部分であり、後者と考えられる。墓誌の「暮」は「墓」の誤りか、あるいはことさら何かの意を含んでのことか。



図137

(5-8) 裴春遊墓（図篠原138）

保大十一年二月十七日 広義省思義府
義安総田庄村
皇朝誥授侍事太監中議大夫裴春遊貴公之墓
承嗣 廕授裴有桂奉 誌

保大十一年は1936年。中議大夫は「誥授中議大夫」（従三品）を指すと思われる⁴⁴⁾。



図138

(5-9) 陳福墓（図篠原139）

河静省徳寿府香山県安邑総安邑社
大南 皇朝勅授宮監院典帑太監陳諱福法名清祿之墓
八月初二日謝世



図139

(5-10) 裴豹墓（図篠原140）

太監承佐裴豹之墓



図140

44) 『欽定大南会典事例』 卷7、吏部、官制、階制品級、明命八年。「従三品…、誥授中議大夫」

(5-11) 陳見明墓 (図篠原141)

保大十三年五月二十三日逝世
皇朝勅授検事太監陳貴公法名清勝字見明府君之墓
広治省永靈府州市坊寓在水波下社 承嗣 陳徳浄奉誌

保大十三年は1938年。墓誌の裏に詩が刻まれている。



図141

(5-12) 范吉祥墓 (図篠原142)

保大十一年二月日逝去
皇朝誥授侍事太監范貴公法名清禎字吉祥府君之墓

保大十一年は1936年。



図142

(5-13) 裴憲静墓 (図篠原143)

癸亥年四月二十二日謝世
皇朝誥授中議大夫營務太監諡憲静裴侯之墓
貫清化静嘉広昌美石 承嗣 克沢 奉誌

癸亥年は1863、1923年だが、後者であろう。



図143

(5-14) 阮宝雨墓（図篠原144、145）

埋葬主体部：A-2（4段）	啓定五年正月望日逝世 河内省常信府青池県黄梅総黄梅社兌村人 皇朝宮監院營務太監法名清雲字宝雨阮侯之墓 廕授正八品文階阮如寧 奉誌
---------------	---

墓地1の中で唯一A-2式の主体部を持つ。段数の多いものは皇族墓に例があるが、宦官の中でも特に身分の異なる者であろうか。啓定5年は1921年。



図144



図145

(5-15) 權曰心墓（図篠原146）

嗣徳十三年生 河静右河耕獲美禄永知 皇朝誥授營務太監法名清楽字曰心權貴公之墓 保大七年十一月二十八日 謝世

嗣徳13（1860）年の生まれで、保大七年は1932年。



図146

(5-16) 阮伯長膽墓（図籐原147）

保大九年十月初九日謝世
皇朝誥授侍事太監阮伯公法名清進字長膽之墓
清化省圖山社 承嗣阮伯啓奉立

保大九年は1934年。



図147

(5-17) 阮廷右墓（図籐原148）

丙申仲春
皇朝誥授典親太監阮廷右法名清応字興隆之墓
阮廷恵 奉造

丙申（年）は1836、1896年。



図148

(2) 宦官墓地 2

3基の宦官墓が、方形の塀に囲まれている。前後にビンフォンを有し、入り口は外塀に2カ所（両端）、内塀に1カ所（中央）あり、その間にビンフォンが内塀の入り口を塞ぐ形で設けられている（図籐原149）。墓の主体部はいずれも方形を2段積み上げ、最上段を円形とする。方形の段は磚製であるが、本来は漆喰によって覆われていたものと思われる。円形主体部は、最下部を波打たせるような形状にしているのが特徴である。主体部の前方には祭台を設け、その上に墓誌を立てる。



図149

(5-18) 鄧信墓（図篠原150）

歳次甲戌仲夏吉旦
検事太監鄧信授優婆塞戒法名清洲号道法之墓

甲戌年は1874、1934年。



図150

(5-19) 楊畏之墓（図篠原151）

嗣徳辛巳年春二月初八日卒
皇朝勅授首等典事太監興功慈孝寺法名清光字畏之楊府君之墓
清化省寿春府雷陽県上谷総富歛社

嗣徳帝の辛巳年は1881年。



図151

(5-20) 杜視墓 (図篠原152)

歳次戊寅年孟夏上涙立碑誌
 皇朝誥授典帑太監諱視法名海恬杜府君之墓
 海陽建瑞宜陽古齋総玉輦社

戊寅年は1878、1938年。



図152

6) 華人墓

阮朝の時代、フェには多くの華人、いわゆる中国系の人々が移り住んだ⁴⁵⁾。その歴史は本書のドー・バン論文や西村論文などで触れられているためここでは省くが、フェに移り住んだ華人は、出身地別に集団墓地をなしているという。筆者が調査したのは3カ所である。

(1) 華人墓地1 (広東人墓地)

フェ市街地の南、御屏 (Núi Ngủ Bình) 山の東南に位置する (図篠原1および図61)。広東人の墓地が多くその名で呼ばれているが、他郷の華人、ベトナム人の墓もある。調査は墓地の一部地域のみで行なった。

(6-1) 梁発公墓 (図篠原153、154):

全長506cm、全幅453cm 外周：方I a型 埋葬主体部：D-3 被葬者：男 ビンフォン：② 墓誌位置：墓前	保大十年仲春 広東 梁発公之墓 義順公孫長女氏休奉立
---	----------------------------------

保大十年は1935年。墓誌は阮朝の様式である。

45) 前述の明香陳氏も広義では華人に含まれるが、本稿では「華人」・「華人墓」と表現する場合は明香陳氏を含まず、阮朝以降にベトナムにやってきたと考えられる人々を指し、「華人系」と表現する場合は、明香陳氏を含む包括的な概念として使用する。

フエの古墓資料調査（篠原）



図153



図154

(6-2) 天来公之墓（図篠原155、156）

埋葬主体部：D-2型 被葬者：男 ピンフォン：④ 墓誌位置：墓前	鄧府 顕考広東東莞県天来公之墓 小丰 季子 小溪 小江
---	--------------------------------------

外周を持たず、年代不明で古墓とは断定しがたいが紹介しておく。「東莞県」は字が崩れているが、広東省の東莞県（現在は市）で間違いのないと思われる。鄧府は鄧氏を指し、天来は被葬者の名であろうか。



図155



図156

(6-3) 梁門李氏孺人墓 (図篠原157、158)

全長715cm (羨道190cm)、 全幅456cm 外周：円Ⅱb型 埋葬主体部：D-3 被葬者：女 ビンフォン：② 墓誌位置：墓前	保大十年歲次乙亥春 奉為 頭妣中華國民依夫梁門李氏孺人之墓 衆子 依夫公孫氏 正嫁氏肥 奉立 判事氏施
--	--

外周は円形で先端部は鳥頭形に作られており、被葬者が女性であることを示す。保大十年は1935年。立誌者の公孫氏とは、被葬者の息子の妻を指すか。



図157



図158

(6-4) 守忠何少君墓 (図篠原159、160)

外周：円Ⅱa型 埋葬主体部：D-2 被葬者：男 ビンフォン：② 墓誌位置：墓前	中華広東南海洲村郷 仲弟 ^譯 守忠何少君之佳城 民国卅四年 兄守謙立石 乙酉春三月
---	---

民国34年乙酉は1945年。「佳城」の語は珍しく、墓誌を立てたのは兄である。碑身には石を平らに削った鑿の跡が確認され、石面に直接文字を刻んだことが分かる。



図159



図160

(6-5) 関門張氏墳墓（図篠原161、162）

外周：円Ⅱa型 埋葬主体部：不明 被葬者：女 ビンフォン：② 墓誌位置：奥壁	歳次己未吉日造 関門張氏墳墓 男 関士治 立
--	------------------------------

漆喰と思われる床面の上部構造がない。遷葬により主体部を移したのであろうか。「墳墓」の語は珍しい。己未年は1859年、1919年、1979年であるが、1919年が妥当と思われる。



図161



図162

(6-6) 凌民参墓（図篠原163、164）

埋葬主体部：D-2 被葬者：女 ビンフォン：④ 墓誌位置：墓前	梁門 凌民参之墓 男 梁任汝奉立 長
--	--------------------------

外周を持たず、主体部は蓮華模様の枠を設け、土を盛り上げる。梁門と夫の家門を記していることからみて、被葬者は女性であろう。長男の字が逆さになっているのは、ベトナム語の表記順によるものか。



図163



図164

(2) 華人墓地2 (潮州人墓地)

万福寺入口のすぐ横にある墓地 (図篠原165)。道と墓地の境界線あたりに「潮州塚義塚地界」と刻まれた石の棒 (標) が立てられていた。見た限りでは30基ほどの墓が確認できた。墓は整然と並んでいるようには見えなかったが、陳族、黄族、林族がそれぞれ集団墓域を構成しており、それに伴う后土碑も数基見られた (図篠原166)⁴⁶⁾。墓は小型で質素なものが多く、「林無名」と記しただけの墓誌もある。また墓地内にはベトナム人の墓もあり、通訳の *Tông Thát Quang Anh* 氏の話では、戦時の混乱期に、死者を一番近い場所に埋めたためであろうという。墓誌銘は漢字、ベトナム語の両方が用いられており、古いものは漢字が多いが、華人の墓誌銘が必ずしも漢字であるわけではなく、特に規則性は感じられなかった。銘文には「清故」というものもあるが、多くは20世紀以降の墓のように思われる。

墓地は現在、ベトナム人の女性によって管理されている。彼女は墓地のかたわらにある家に住み、外祖母が潮州華人であったという。墓主の後孫のほとんどは国外に住んでおり、彼らからの仕送りが彼女の生活費と墓地の管理費になっている。以下、墓誌を2例紹介しておく。

46) *Quyén* 氏の話では、「后土」は19世紀以前からあり、「土神」の語は19世紀以降使用されるとのことであった。



図165



図166

(6-7) 劉江公墓（図篠原167、168）

埋葬主体部：D-2	民 国 三 十 八 年	廣東潮州揭陽城内
被葬者：男		祖考劉江公墓
ピンフォン：④		潮州帮 立
墓誌位置：墓前		

外周を持たない簡素な墓。民国38年は1938年。



図167



図168

(6-8) 蔡吉祥貴公墓 (図篠原169、170)

外周：円I型 埋葬主体部：D-2 被葬者：男 ビンフォン：④ 墓誌位置：墓前	辛巳年十二月吉日造 中華民國 廣東潮州澄海程陽鄉住領 奉為顯考蔡吉祥貴公之墓 哀牢国沙汶省華僑代表 孤子 惠確 惠勇 惠節 惠皇 惠威 金英 胞弟奉誠大夫蔡合理 泣立
--	--

石積みで外周を設けたもの。入口部分の厚みは羨道にも見えるが、割石による積み上げが崩れるの防ぐ措置と思われるため、円I型とした。

中華民國の辛巳年は1941年。「哀牢国沙汶省華僑」の文字が興味深い。哀牢国とは『後漢書』に登場する雲南省一帯にあったタイ族系の国だというのが、近世のベトナムにおいてはタイ人を哀牢と呼んだという指摘⁴⁷⁾がある一方、ラオス方面とする説もある⁴⁸⁾。いずれにせよ彼は他国の華僑代表として生き、ベトナムの地に葬られたのであろう。



図169



図170

(3) 華人墓地3

広東人墓地と道路を挟んで東にある。夫婦墓1基、婦人墓1基を調査した。

47) 『アジア歴史事典』1巻(平凡社、1959)、5頁。

48) 前近代における哀牢はラオス方面を指し、沙汶省はラオスのサヴァナケットの可能性があるといる。サヴァナケットはベトナム中部北域から山を越えた場所にあり、ベトナムとの往来が盛んであったという(西村昌也氏の教示による)。

(6-9) 傅一朗府君・黎娘墓（図篠原172、173）

外周：方型 埋葬主体部：C 墓方位：150° 被葬者：夫婦（双墓） ビンフォン：不明 墓誌位置：墓前	清 □巴貴仲秋穀旦 顯 □□訓導傅一朗府君之墓 故 □黎氏生孫夢香立石	歲次庚申三月吉旦 顯祖妣依夫訓導黎娘之墓 嗣孫傅能香立石
---	---	------------------------------------

方形の外周（塀）を持ち、内部に2基が東西（傅一朗府君墓が西、黎娘墓が東）に並んで配される（図篠原171）。塀は一辺6mほどと思われるが、損壊が激しく、入口の位置も確認できなかった。後孫による管理がされていないようである。

傅一朗府君墓の埋葬主体部は損壊が激しいが、黎娘墓と同様C式と思われる。清故の文字からみて、傅一朗は清からやってきた華人であろう。紀年は摩滅のため不明である。黎娘墓の庚申年は1860、1920年のいずれかと思われる。黎氏はベトナム系であろうか。立石とあるが、墓誌は漆喰のようにも見える。

両墓の立石者は共に「香」字を名に持ち、傅氏と黎氏の子孫であることから、両墓の被葬者は夫婦とみて問題なからう。傅一朗府君墓を立てた夢香がわざわざ自身を「黎氏の生孫」と称したのは、傅氏に黎氏以外の妻（とその子孫）がいたためであろうか。現地の人の話によると、近くに后土碑があったというが、調査時には見つからなかった。



図171



図172



図173

(6-10) 潘再室陳氏墓（図篠原174）

被葬者：女 墓誌位置：墓前	光緒丁酉年季冬月 夫義光居琼府文昌 清 潘再室陳氏 女媿媿安媿 城 瑞 子 男子 現 子 瑚 子
------------------	---

墓6-9から北に数十メートル離れた場所にある。近くに「潘宅山界」の文字が入った石板（図篠原175）

があり、潘族の集団墓地を指すものと考えられる。現地の人の話では他にもこうした石板がいくつかあるとのことであった。藪に覆われ墓そのものは確認できなかった。墓前の碑は、下部が地中に埋まっておき全文を確認できなかった。

光緒丁酉年は光緒23（1897）年にあたる。ただし近接する6-9に比べ墓誌が非常にきれいで、後世に作り直した可能性もある。陳氏は潘氏の二番目の正妻であろう。左下に列記された子女の名は、立碑者であろう。



図174



図175

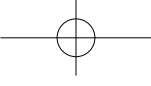
小 結

調査した墓は、被葬者の生きた年代で見ればおよそ17世紀～20世紀にわたっているが、18世紀以前の墓は当時のものではなく、改修を経たものである可能性が高い。また造成当時の姿を保持するのではなく、現在の視点から華美なものにしたいという意識がより強いようである。この点は、近年のフェでは墓を壮麗にすることが先祖への礼節を尽くす行為だと考えられており、そうした墓は「陵」と呼ばれているという指摘⁴⁹⁾からもうなずける。

興味を持たれたのが共同墓地である。華人の墓地は故郷（出身地）別に共同墓地を形成し、その墓地内で氏族別の境界を決めていたようだが、ベトナム人系（ディアリン・バオヴィン）の共同墓地にはそうした界標はなく、阮科族の墓も世代や夫婦関係に伴う規則性は見出せなかった。

いっぽう寺の寺域に共同墓地のような空間が設けられているのは、日本の例と似ている。身分は皇室（公主）、宦官、庶民など様々である。明香陳氏や華人墓の場合は、管理人に一定の報酬を渡して管理を委託していたが、寺の場合もそうした管理運営のシステムがあるのかもしれない。ただ法名が記載されない墓誌もあり、彼らが仏教信者でないとするれば、日本の檀家制度とは異なる受け入れ体制が存在する

49) グエン・クアン・チュン・ティエン「フェにおける葬礼への宮廷文化・仏教・儒教の影響」（『陵墓からみた東アジア諸国の位相——朝鮮王陵とその周縁——』、文化交渉学教育研究拠点、2011年）、160-161頁。



フエの古墓資料調査（篠原）

ことになる。ちなみに筆者の専攻分野である韓国には、筆者の知る限りにおいて、寺には浮屠（僧の墓）以外の墓は存在しない。こうしたフエにおける儒教や仏教と死者の関係が、時期的にいつごろまで遡ることができるのか、興味をひく。

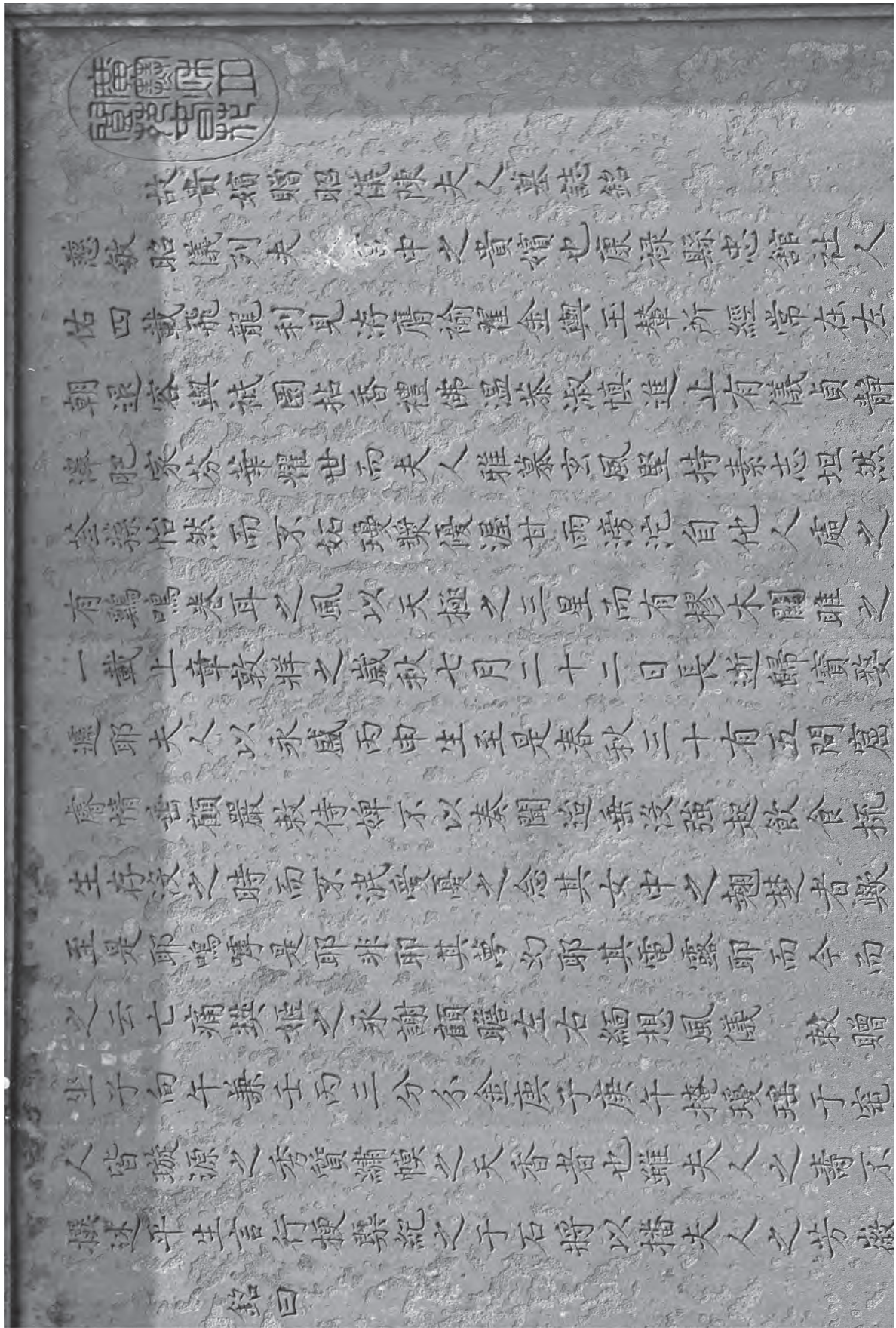


図176 (誌 上段)

姓陳氏諱麗法名海法勳理能才侯之女少以容行
 右性警敏善承顏色 脣情怡悅無分毫遠忤雖日
 幽閑言笑有則質之形史昔聞其語今見其人矣鳳
 而不驕三昭在列九郡盈庭自他人處之鮮不以粹
 鮮不以金翠曳曳珠璣珮服而夫人鞠衣去地素面
 德是直春光未艾景福無涯遺碧藕于上元錫水挑
 于星躔返嫦娥于月殿金鈿杳杳嗟青鳥之不来玉
 洲而無路歌高里之不歸長辭桃李之園永闕松楸
 粧若病之去體終無一語及後事奄然而羽化嗟乎
 將珠宮僊女超勝會以駉驚抑漢清天孫厭塵寰而
 後惟傳香粉於迎風細行想畫衣於隔水殘霞而夫
 昭儀列夫人謚慈敏彰天寵也以景興辛未十一月
 窆歸環珮于沉寒栖神般若之紺園脫屣漢家之金
 可問而麟趾螽斯之慶其蕃衍矣乎九原之下可以
 壽夫人之懿德者也千載之後其有感於斯文

図177 (誌 中段)

入青宮齊莊柔順奉侍帷幄日見恩寵不
月臨榻雲韶在耳而夙宵祇敬靡懈勤勞
冠錫寵魚貫承恩自他人處之鮮不以恩
黛爭妍梳粧聞寵而夫人吹嘔蘭蕙極植
朝天澹然而不侈嗚呼以崑山之片璧而
千金母而纏綿一恙奄忽六如以景興十
漏遲遲悵征鴻之靡屆天之奪夫人何其
之宅嗚呼痛哉夫人在病時每遇沉劇恐
以脂粉闥帟之質而不為兒女之情以死
跨鳳不然何珠沉而玉碎挂項而花摧一
人不可復見矣嗚呼痛哉 脣情悼徐惠
初一日甲子丁時安厝于楊春社地分山
屋嗚呼痛哉夫人所生公子四人公女三
寬懷矣迺賸佳城 宸衷有惻爰命詞臣

図178 (誌 下段)

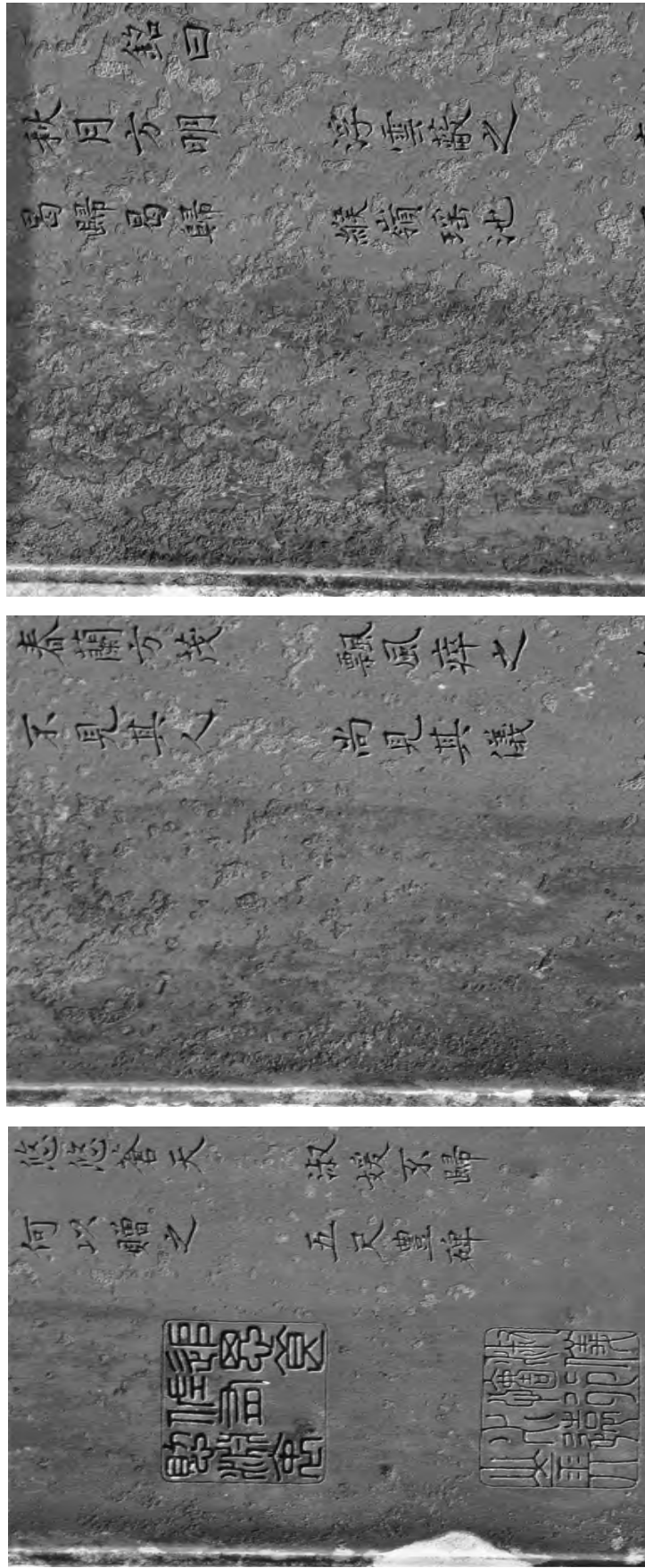


図179 (銘、右から上段、中段、下段)

